天遊人～テンプレーター～

突貫作業人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天遊人～テンプレーター～

【Ｎコード】

Ｎ４５４４Ｌ

【作者名】

突貫作業人

【あらすじ】

天遊という秘術を使う元貧乏探偵の主人公が、王女様に苛められたり、アイドルにツンツンされたり、ロリっ娘とキャッキャウフフしたりしながら（予定）、怪異事件という人智を超えた者たちとの戦いに身を投じていくお話。

ｔｅｍｐｌａｔｅ：１　意外な再就職先（前書き）

ある日ふとネタが思いついてそれを書きたいがためだけにこの小説を書きました。
最低でもそのネタを披露できるところまで書きたいです。
久しぶりの執筆ということもあって構成は無茶苦茶、文体は崩壊というひどい有様ですが付き合っていただけると幸いです。
ちなみに残酷描写ありになっていますが、あくまで保険です。

ｔｅｍｐｌａｔｅ：１　意外な再就職先

ｔｅｍｐｌａｔｅ：１　意外な再就職先

某年某月某日某時。

宇宙の彼方に存在する惑星「フォルスアース」。

科学と魔法があわさって発展した青の星。

その七つの大陸の中で最も大きな大陸の隅の自然豊かな小国。

エクスファルナ王国王都ユーフォリアに位置する王宮の一角。

そこに一人の青年が招かれた。

名をアドル・レンフィールドという。

中肉中背のモンゴロイド。漆黒の髪と瞳。典型的な東洋人といった容姿をしている。

白人が多数を占めるこの国で彼の姿はよく目立つ。

現在彼が居るのは美しい花園の中心に建つ透明な箱の中。

透明な箱……広々としたサンルームは暖かな陽光で満ちていた。

部屋の中央には純白のテーブルセット。その隣にはチェステーブルもある。

部屋の主である美しい少女は、椅子に腰かけ、メイドの淹れた紅茶を口に運んだ。

たったそれだけの動作で彼女の生まれ持った気品、受けてきた教育がいかに素晴らしいものかが分かる。

少女はメイドを下がらせると、対面するアドルを見上げ、微笑んだ。

「今日は気持ちのいいお天気ですね」

彼女の言葉のとおり、薄いガラスで隔てられた先には雲一つない青が広がっている。

春を感じさせる陽気の訪れに、庭の花々も歓喜していることだろう。

しかしアドルは憮然としていた。

「天気の挨拶から始めるほど見知らぬ仲じゃないだろ」

「いいじゃありませんか。ご無沙汰していましたし」

「出来れば会いたくなかった」

「またまた御冗談を。照れなくてもいいんですよ？」

「いや、本心だから。心から思ったことだから」

「男性とは見栄っぱりな生き物だと聞いています。生涯の伴侶となるあなたのことは誰よりも理解しているつもりです」

「誰が！俺の！嫁に！なるって！？」

「私が、あなたの、お嫁さんに、なります」

「いつ決まった！？　何年何月何日何時何分何十何秒地球が何回廻った時！？」

「はぁ～、いまどき初等教育の子たちでも言いませんよ」

「ゆとり教育の結果がコレだよ！」

「我が国はそんな政策とってませんけど」

「細けぇこたぁいいんだよ！」

興奮気味のアドル。少女は肩を落として嘆息した。

「どうしましたか？　今日はいつにも増して変ですよ」

「……それをわざわざ聞いてくるあたり、お前は根っからのドＳだ

な」

アドルは吐き捨てるように言った。少女はというと心当たりがないのか物言いたげな様子だ。

「……？」

「可愛らしく首傾げて許されるなら警察はいらないの！」

本人は違うかもしれないが、傍目から見ればなんてことのない日常だ。

穏やかな光景。ゆったりとした平和なひととき。誰もがそう思うだろう。

……ただ一点をのぞいては。

「おい……いい加減にしろセレス」

アドルは何回目になるか分からない身じろぎをした。

どうにもならないことを確認すると足元を見やる。

「何がですか？」

少女……エクスファルナ王国の王女セレスフィア・リーヴィス・ルノワールは悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「……お前、俺に用事があるんだよな」

「はい！　とても大切なことです。アドルさんに頼みたいことがあります」

「最初に答えておこう。答えはＮＯ。絶対にＮＯ！」

「ええ！？　まだ何も言っていませんよ？　何故ですか？」

「何故かって……そこまでトボけるのなら教えてやる」

アドルは再度、足元を一瞥。それから大きく深呼吸し、力の限り叫んだ。

「これはお願いじゃなくて脅迫だからに決まってんだろうがあああああああああっ！！」

アドルは簀巻き状態で天井から吊り下げられていた。

その下方ではこの場に不似合いな深紅の大釜。

中の液体は完全に沸点を超え、先程からマグマのように嫌な音を

たてている。

それはまるで化け物が真赤な口蓋をみせて獲物を待ち望んでいるかのようだ。

ムンとした熱気がアドルの全身を暴力的な勢いで包み込む。

生命の危機に瀕しているからか、単純に熱いのか、恐らく両方だろう。アドルは汗だくだ。

命綱のロープを切れば、アドルはめでたく魔女の大釜へダイブすることになる。史上最低のダシが取れるに違いない。

それでもセレスフィアはアドルの咆哮の前に笑顔を崩さなかった。

「私たちの仲じゃあありませんか」

「親しき仲にも礼儀あり！　ってかそれ以前の問題だろ！」

「えー」

「お前が呼んでるっていうから何の話かと思って王宮来てみれば、入口で門番に頭殴られて、気がついたらコレだよ！」

「説明台詞お疲れ様でした」

「ふざけろ！」

「え？いいんですか？」

「……ふざけるな」

「……すみません。まぁ存分に堪能しましたし、もう落としますから」

「そ、そうか……って落とすのかよ！！」

一瞬安堵しかけたアドルの心臓が、再び鼓動を打ち鳴らす。

「はい」

セレスフィアは指を軽く鳴らした。

すると、突如アドルの体を支えていた命綱が消え去った。

「え」

抵抗する間もなく落下。

引力が相手では回避の意思も役にたたない。

あとコンマ数秒で着水するというその刹那。

再び乾いた音が聞こえた。

眼前の大釜が消え、磨かれた大理石の床がアドルを迎える。

「ぶっ」

先ず衝撃。次に鈍痛。

固い床に顔面をしたたか打ちつけたアドルはよろよろと起き上がる。

「打ちどころが悪かったら死んでますね」

たった今、魔術でロープと大釜を消したばかりのセレスフィアは涼しい顔で言った。

それどころかうっすら笑みまで浮かべている。

「謝れ」

「ごめんなさい。……テレサ、お茶のおかわりを。アドルさんも何か飲みます？」

「全然誠意が伝わらないんですけど」

アドルは諦めの表情でぼやきながら、セレスフィアと向かい合った椅子に座る。

セレスフィアに呼ばれ、遠巻きから一部始終を見守っていたメイドの少女がやってきた。

テレサ・シトロンはセレスフィアの専属メイドである。

栗色の髪を後ろで束ねた、おっとりとした性格の女性だ。彼女は幼少の頃からセレスフィアに仕えている。そのため、二人の関係は雇用の枠を超えて親友と呼びあえる仲だ。

もっとも、テレサはそれでも主従関係を尊重し、セレスフィアには常に敬意を払っている。

「アドル様は何に致しますか～？」

テレサはアドルに訊ねた。

アドルはどうしても自分より年上の彼女が自分に対して敬語を使うことに慣れない。

「テレサさん、セレスはともかく俺に敬語は使わなくていいですよ」

「そういうわけにはまいりません～。アドル様は立派なお客様ですから～」

これまで何度この会話を繰り返したことだろうか。

アドルはやれやれといった顔で紅茶をオーダーする。

「ミルクティー。角砂糖四つで」

「茶葉はアッサムでよろしいですか～？」

「お願いします」

テレサが紅茶を入れている間、手持無沙汰なアドルは正面の少女を観察した。

腰までとどく波打つ金髪、吸い込まれそうな大きな蒼の瞳。

肌は陶器のようになめらかできめ細かい。

全体の起伏も素晴らしく、下品にならない程度に出るところが出ている。

美の到達点の一つと断言できるほど完璧だ。

天使が実在するのなら、きっと彼女のような容姿をしていることだろう。

内面は悪魔だが。

噂では、王族を守護する近衛騎士団「イージス」のメンバーは七割方、間近でセレスフィアを見るために厳しい競争を勝ち抜いた者たちらしい。

この国は色々間違っているとアドルは思う。

「アドルさん、何ですかさっきから。私の顔に何かついてます？」

「久し振りに会ったから、ちょっと視姦してた」

見惚れていたのを隠すためとっさに口から出た言葉はどうしようもなく最低で下劣だった。

当然、セレスフィアの眉がぴくんと反応する。

「それはもう一度吊るされたいという意思表示ですか？」

「ごめんなさいすみません許して下さいお願いします」

「本当は？」

「セレスのあまりの美しさに見惚れていた」

「もう、照れてしまいますわ」

「お言葉ですが、夫婦漫才は他でやってくださいね～」

アドルはテレサが淹れたミルクティーを口に含む。

クリームのような滑らかな舌ざわり。芳醇な香りが口いっぱいに広がる。

低温殺菌したミルクを使用しているためだ。アドルのような一般庶民には中々味わえない。

「うまい」

「ありがとうございます～」

ようやく一心地ついたところで、アドルは今回の件について切り出した。

「そろそろ俺を呼んだ理由を話してくれるな」

「ええ、分かりました」

セレスフィアはこれまでとは一変、真顔で語りだした。

「単刀直入に言います。戦ってください」

「端折りすぎだろ」

アドルのつっこみは怖ろしいほど速かった。

「……近年、異形の者たちによる怪異事件が増加しているのはアドルさんも知ってのとおりです」

「待て。それは初耳なんだが」

セレスフィアは心底意外だったのか目を丸くして

「貴方……それでも探偵ですか？信じられませんありえません世界中の探偵さんに失礼ですよ。土下座で謝ってください」

なじった。

そう。何を隠そうアドルは小さな探偵事務所を営む私立探偵なのだ。

彼は義務教育を終えると同時に推理小説の影響を受けて探偵になった。しかし現実は厳しく、物語の中のような魅力的な依頼はいっこうに舞い込まない。そもそもユーフォリアの治安は騎士団による頻繁な警邏によって保たれているので、事件の発生率が非常に低い。よって探偵に仕事が回ることは滅多にない。増してなんの実績もない新米に依頼する人間は皆無だった。それでも食い扶持を稼がないと生きていけないので、仕事を選り好みしない、半ば便利屋のよう

な状態で今日までなんとかやってきたのだ。

しかしそれも限界にきている。何故なら今週に入ってから一件の仕事もこなしていないからだ。

今月の家賃を払うのはまず無理だろう。

つまりアドルは現在進行形で貧困に喘いでいる。

彼の自宅兼事務所には明日のパンどころかコーヒー豆の一欠片も残っていないという悲惨な状況だ。

彼が素直にセレスフィアに会いに来たのは、食事を用意してくれているのではないかという淡い希望を抱いたからである。

「……仕方ないだろ。情報屋は貧乏人にとことん厳しい。今日履いている靴下の色だって教えてくれないぜ。そもそも俺は今、朝刊をとれないほどピンチなんだ。情報源なんて窓の外から聞こえてくるオバチャンたちの談笑くらいしかないな」

「どれだけ情けないんですか貴方は」

「返す言葉もない」

セレスフィアは軽蔑の視線を項垂れるアドルに向ける。数秒間その状態が続き、セレスフィアはため息をついた。

「もういいです」

呆れた表情に諦めた口調。しかしアドルは気づいていた。彼女の目が笑っていることに。

どうやら自分の現状が彼女にとって都合のいいものらしい。

「何か変なこと企んでるだろ」

「いえいえ、それよりも話を続けましょう」

セレスフィアは軽く咳払いすると、何もない空間から紙の束を取り出す。他所と空間を繋げてそこにあるものをこちら側に引っ張り出したのだ。本人は平然とやってのけたが、実際は上級魔術の応用版である。

アドルはさっきの大釜といい、これといい、目の前の少女はもう少し別のところにその才能を使うべきだと強く思った。というか願った。主に保身のために。

「これを見てください」

セレスフィアが取り出したばかりの書類をアドルに渡す。

ざっと目を通すと、すぐにこれが怪異に関する資料だと把握した。

怪異自体の存在は一般人にも広く知れ渡っている。

言うなれば怪異とはこの世の不可思議な現象事象生命。

身近なところで幽霊や妖怪、その他になると悪魔や魔獣、神の遣いといった異形の者たちだ。

怪異とは広義でそれら異形の総称なのだ。

「なるほど」

怪異の目撃証言、失踪者の数がこの数カ月で加速度的に増加していた。昨年の同時期に比べると三倍以上だ。

早急に手を打つ必要があった。

「現在、怪異による被害は既に無視できない規模になり、騎士団を動かしても解決できるのはほんのわずかです。いくら精鋭揃いの彼らでも、異形の者を相手にするのは人間を相手にするのとわけが違います。そこで政府は対怪異に関する部署を新設しました」

「対怪異のプロフェッショナルってことか」

「はい。怪異対策管理局です」

ここまで聞いて、アドルはなぜセレスフィアが自分を呼び出したのか合点がいった。

彼女は自分の持つ秘術「天遊（てんぷれ）」の力を借りたいのだ。

確かに天遊の力を行使すれば並の怪異、化け物なら赤子の手を捻るように倒せるだろう。

しかし天遊はその能力の性質上、公にその力が知られるわけにはいかず、なお且つアドル自身が使用を躊躇っているのはセレスフィアも知っているはずだ。

アドルはもう少し詳しく話を聞くまで判断を待つことにする。

「で、お前は俺にそこで働けと言いたいのか」

「話が早くて助かります」

早速予感が的中する。

「俺は一言も働くなんて言ってない」

「お願いですアドルさん。貴方にしか頼めないことなんです」

アドルは思わず息を呑んだ。

なんとセレスフィアは頭をテーブルにつきそうになるくらい深く下げていた。

この国で王、王妃に続いて権力を持つ人間が平凡な庶民に頼み込む。普通は考えられないことだ。

従わせるのなら命令すればいいのだから。

しかし大きな衝撃を受けてなお、アドルの心は頑なに天遊を使うことを拒んだ。

しばらくしてセレスフィアは頭を上げた。

「……これはあまり言いたくなかったのですけど、貴方は野垂れ死ぬつもりですか？」

「う……」

セレスフィアの一言は効果絶大。完全に的を得ていた。

今のアドルはもう仕事を選べない状況にある。

「いい大人が真昼間からごろごろだらだら。恥ずかしいと思いませんか」

「お前は俺の保護者か？」

「間違ってます？」

アドルは言葉に詰まった。

保護者……そう。セレスフィアはアドルにとってある意味保護者なのだ。

訳ありの彼がこの国で平凡な生活を過ごせるのは彼女の力によるところが大きい。

アドルもそのことを口には出さないが感謝していた。故に昔から頭が上がらなかった。

それは今回も同じで長く黙り込んだ後、

「わかったよ」

セレスフィアの望みを願い受けた。

「ありがとうございます」

セレスフィアは優雅に微笑んでみせた。

美しい、だがなんの飾りもない屈託な笑み。

長い付き合いだからこそ、アドルはその感謝が心からのものだとすぐに分かった。

それだけになんとなく自分の対応の不真面目さを悔いた。

彼女は国のことを思って、やり方はともかく、自分のような人間に力を貸してくれるよう頼んだ。

おまけに貧困に喘いでいる自分に職を与えてくれたのだ。

感謝するのはむしろこちらの方だろう。

アドルは自分の浅はかさに嫌気がさした。

「どうしました？」

「……なんでもない」

アドルは気恥ずかしさから目をそらす。しかしすぐにハッとなって視線を戻した。

「いや、一つあった。俺がそこで戦うかわりに条件がある」

「天遊に関してですね。それについては既に手を打ってあります」

「というと？」

「アドルさんに落ち度がない限り、貴方が天遊を使った形跡はまず完全に消し去ります」

「それは頼もしい。あともう一つ」

「何ですか？」

「俺が天遊を使うのはあくまで怪異に対してのみだ」

「ええもちろん。例え戦争が起きて、我が国が劣勢になったとしても貴方を巻き込まないと誓います」

「分かった。それじゃあ俺は国のために働く真人間になるわけだが……改めてよろしくなセレス」

「はい。アドルさん」

「よし。そうと決まればまず俺はどの課に配属される予定なんだ？」

「アドルさんには総合独立課をお願いします」

「なん……だと」

「そんなに驚くことですか？」

「言ってみただけ。というか、そこは何するところ？」

「総合独立課。つまり通常は各課で分けて処理している問題を全てまとめてこなしてください、というところです」

セレスフィアはとんでもないことをさらっと言ってのけた。

「ちょっと待とうね。おかしくない？」

ここはアドルでなくても疑問符を浮かべるところだろう。

怪異に関する事件の難易度は、人間の起こすそれを遥かに凌ぐ。

現場に証拠が残ることは少なく、異形の追跡も容易でない。相手の能力も未知数だ。

故に怪異事件とは情報処理を始めとするバックアップや精鋭を揃えた現場の人間が結束してやっとどうにか出来る問題なのだ。

それをたった一つの課で片づける……無謀としか言いようがない。

「感謝してくださいね。これはアドルさんのために用意した場所なんですから」

「どういうことだ？」

「先ほど言った貴方の力を他人に知られないための対策の一環です。信頼できない人達の前で力を使うわけにはいかないでしょう？」

「……納得。それじゃあ、その総合独立課には他にどんなメンバーがいるんだ？　俺の力のことを知っている人間はそれほど多くないハズだろ？」

この国でアドルの能力について知っているのはセレスフィアを入れても両手で数えるほどしかいない。しかもそのほとんどがとても自分の仕事を手伝えるほど余裕があるとは思えない。

本能的な部分が警告する。厭な汗が額に流れた。そして予感は的中した。

「ええ。ですから総合独立課は貴方一人だけです」

「……はい？」

※

日が傾き空が茜色に染まりだした頃、ようやく全ての話が終わり、生気を失ったアドルが帰っていった。

（もう少し反対されるかと思いましたけど……意外とすんなり受け入れてくれましたね）

セレスフィアの胸中が安堵と達成で満ち足りる。

肩の力を抜いてゆったりと背もたれに身を任せるが、無駄な装飾の多いドレスやきついコルセットが完全な安らぎを与えてくれなかった。

それでも幾分かマシになったところで大きく深呼吸する。

その後、柔らかく焼きあがったマカロンの味を楽しんでいると、厨房へ行っていたテレサが戻ってきた。

彼女の両手が支える皿には何やら大きな焼き菓子のような物体が乗っている。

セレスフィアにはすぐにそれがなんなのか分かった。

「ブリオッシュね。　テレサ、いくら忙しくてお昼を抜いているとはいえ、その量をこの時間に食べるのはどうかと思うけど」

某国の某王妃が「パンがなければお菓子を食べればいいじゃない」と言ったそのお菓子というのが今テレサの持っているブリオッシュだ。

正確には菓子ではなくパンなのだが、大量のバターと卵、水の代わりに牛乳を入れることからケーキのような仕上がりをみせる。

今でこそ平民でも口にできるものだが、一昔前までは一介のメイドが文字どおり私腹を肥やすために作れるようなものではなかった。

「何を仰いますかセレスフィア様。お腹が減ってはメイドはできん、です」

言いながらテレサは先ほどまでアドルの座っていた椅子、つまりセレスフィアの正面に座った。

これは立場を取り払って、単純に親友としてアフタヌーンティーを楽しむ、いわば二人だけの合図みたいなものだ。

まぁ今回に限ってはとてもアフタヌーンティーと呼べない時間になってしまったが。

二人の話題は自ずと契約を結んだばかりのアドルのことになった。

「アドル様は大丈夫でしょうか〜？」

アドルの力について話には聞いているが、実際にそれを目にしたことのないテレサはしきりに不安がっていた。

彼女の様子が可笑しくてセレスフィアはくすりと笑みをこぼす。

「大丈夫に決まってます」

「セレスフィア様は本当にアドル様を信頼していますね～」

「信頼じゃありません。アドルさんにはこの程度のこと簡単に片づけてもらわないと困るんです」

「それを信頼って言うんじゃないですか～」

セレスフィアとしてはそう指摘されるとなんだか全力で否定したくなる。

テレサはニコニコしている。表情には出さないが内心ではニヤニヤしているのだろう。

自分にとってのアドルとは初めての異性の友人で、何か困ることがあれば嫌々ながらも助けてくれる、お人好し。

……本当にそれだけだろうか。いや、違う。

アドルに対する気持ちはテレサの言う信頼とは少し違う。強いて言えば信仰。

彼は自分にとって身近にいる神様のようなものだ。

他人が聞けば笑ってしまうかもしれない。いや、きっと笑うだろ

う。

一国の王女がただの庶民を神と崇めているのだから。

それでもセレスフィアは思う。

あの日、自分がまだ幼かったあの日。

自分の我儘を聞いてアドルが起こしてくれた奇蹟を忘れない限り、彼を信じ続けるだろう。

「でも心配ですね。きっとたくさん危険な目に遭いますよ～」

「そうですとも。むしろ何度も命の危険に晒されるでしょうね。でも大丈夫なんです」

アドルにはこの先多くの困難が待ち受けているだろう。

それは何も怪異事件に限ったことではない。

彼の持つ暗い過去、その宿命、そしてこの国の未来さえも、彼は乗り越えなければならないかもしれない。

でもきっと彼ならできるだろう。何故なら彼は

「アドルさんは天遊人（テンプレーター）ですから」

ｔｅｍｐｌａｔｅ：１　意外な再就職先（後書き）

作者はメンタル面が驚きの脆さなのでやんわり注意していただけると助かります。

……すみません贅沢言いました。

酷評受け付けます。それを糧に精進する次第です。

第二話予告とか（前書き）

気にせずスルーしてかまいません

第二話予告とか

おまけというか作者が空気を読まずにやっちゃった蛇足コーナー

――――天遊人第一話終了後

セレスフィア（以下セレス）：さぁついに（？）天遊が始まりましたね。皆様お楽しみいただけたでしょうか？

アドル：疲れてるんだ。頼むから帰らせてくれ……

セレス：ダメです

アドル：なぜ？

セレス：このヘボ小説のヘボ作者はこういった意味のないことが大好きだからです

アドル：それ答えになってるようで全然なってねぇよ！

セレス：ジャッキー・チェン主演映画のＮＧ集のように最後までエンターテイナーとして全力を出したい、だそうです

アドル：全世界のエンターテイナーにジャンピング土下座しろ

セレス：なんですかそれ？

アドル：この世界で最もアグレッシブな謝り方

セレス：今度私もやってみ―――

アドル：やめろ

閑話休題

アドル：おうちかえりたい

セレス：駄目です。これが終わるまで帰らせません

アドル：明日から早速仕事なんだけど

セレス：もちろん知っています。私が決めたことですし

アドル：初日から体調不良じゃまずいだろ。帰らせてくれ

セレス：せめて今回のダメだったポイントだけ押さえておきましょう

アドル：何それ？自分で自分の首しめるの？つまりここで作者のスーパー言い訳タイム開始ってわけか

セレス：まずはこれに尽きますね。「天遊人ってなんぞ？」

アドル：タイトルにもなってるのに初っ端からスルーしてたな

セレス：冒頭に軽い説明を入れるだけでも随分違うと思うんですけ

どね

アドル：まぁ天遊人及びその能力「天遊」に関してはそのうち出てくるはずだから

セレス：そのためには可及的速やかにアドルさんがトラブルに巻き込まれる必要がありますね

アドル：そんなに嬉しそうに言わないでくれ……

セレス：そういえば他にもつっこみポイントがありました

アドル：何？

セレス：過去の話ですよ。アドルさんがどうして訳ありなのかーとか、どうして完璧超絶美少女である私と縁があるのかーとか。あとは……私とアドルさんの馴れ初めについて、とか

アドル：よし、次にいこう

セレス：えー

アドル：俺も気になることがある

セレス：なんですか？

アドル：これの時代背景。どれくらいの頃の話なのか不明すぎる。文明レベルも分からん

セレス：あまり気にしないでください。適度にファンタジーで適度

に現代です

アドル：１９～２０世紀初頭くらい？

セレス：もっと昔の場合もありますし、その逆もありますね

アドル：どんだけ適当なんだ……

セレス：時代とテクノロジーが比例しない作品なんて幾らでもあります。蛇と呼ばれる傭兵が核搭載二足歩行型戦車を相手に活躍するゲームとか

アドル：それにしたってなぁ

セレス：例えば次の話で登場する予定のマイク

アドル：マイクってあの歌う時のマイク？

セレス：はい。この物語の中でのマイクは「拡声魔法を転用した技術でつくられている機械」です。魔術が組み込まれているのなら登場してもおかしくないですよね

アドル：微妙に納得できない

再び閑話休題

セレス：閑話休題って便利ですね

アドル：詰まった時はこれで切り抜ける魔法のような文語だな

セレス：まぁそれは兎も角、そろそろ本題に入りましょうか

アドル：次回予告？

セレス：はい

アドル：消えゆく希望、散っていく命。絶望的状況の中でアドルはこの世界の真実を知る。長きにわたる戦いの果てに待つものは！次回、天遊人最終回「炭水化物をおかずにして何が悪い」

セレス：真・面・目・に・や・っ・て・く・だ・さ・い・！

アドル：ちょっと笑顔が怖いんですけど。今のお前は阿修羅すら凌駕するってカンジなんですけど

セレス：ア・ド・ル・さ・ん

アドル：次回は最初の依頼が舞い込み、怪異事件に立ち向かう。早くもレギュラーメンバーが増量だ

セレス：ただでさえ無個性なキャラばかりなのに更にキャラを増やすんですか？　見分けがつかなくなりますよ

アドル：お前が言うな

セレス：きっと頭のネジが幾つか抜けていますね。外れないよう溶

接しましょうか？

アドル：その処置が必要なのはお前だ！！

セレス：まぁ落ち着いてください。私のおばあ様は言っていました。
『男はクールであるべき、沸騰したお湯は蒸発するだけだ』と」

アドル：それなんて天の道

セレス：今回はこの辺でアリーヴェデルチ（さようなら）！

アドル：（なんでイタリア語……）

ｔｅｍｐｌａｔｅ：２　初めての依頼（前書き）

今回も安定したグダグダっぷりは健在です。
※５月２６日微修正しました

ｔｅｍｐｌａｔｅ：２　初めての依頼

ｔｅｍｐｌａｔｅ：２　初めての依頼

やあ、みんな。

おはようからおやすみまでみんなの暮らしを見つめるアドルお兄さんだよ。

実はボク、新しい就職先が決まったんだ。わーい。

何か当ててみる？

う～ん、じゃあヒントをあげよう。

実はものすごーく安定したお仕事に就いたんだよ。それこそ国がなくならない限りは多分大丈夫だね。

ん？　分かったかな？　分かった人は一緒に答えを言おうね。

せ～の……こうむいーん！

そう。ボクは公務員になったんだ。真の意味でお国のために働くんだよ。

でもね、なんだかボクだけ普通の公務員と少し違うんだ。

どこが違うのかって？それはね

一．給与は完全歩合制
二．職場に自分ただ一人
三．一日十時間労働年休二日制有給なし

この劣悪な環境でボクを強制的にこの職場に押し込んだ人は鬼のようだね。

悪魔かもしれない。

まったくどうして彼女はあんなに……、っ！？

今どこからかものすごい殺気がしたよ。

もうそろそろ現実逃避するのも限界かもしれない。

それじゃあ現実に戻ろう。またね！

「……というわけで現実に戻ってまいりました」

アドルは薄汚れた暗い部屋に立っていた。

壁にはカビがはこびり、天井には蜘蛛の巣がかかっている。

一歩踏み出せばそれだけで埃が立ちこめ、腐りかけた床が悲鳴をあげる。

極めつけはここの先住人。いや、人じゃない。

大小様々な動物、イニシャルGをはじめとした害虫達がここに独自のコミュニティを作っていた。

片っぱしから名前を挙げていってもいいが、誰も得をしないだろうから控えよう。

アドルは窓に近づくと、ぼろぼろのカーテンを引き破って窓を開けた。

そこから首を出して深呼吸。朝の冷たい空気が肺を満たす。

近くに高い建物がないお陰で日当たりだけは良好だ。

「まるで灰かぶり姫の屋根裏部屋みたいだ」

違う点はスペースに余裕があるところだ。

「それにしてもセレスの奴、嫌がらせにもほどがあるぞ」

アドルの脳裏に昨日の衝撃が鮮やかに蘇る。

自分の所属する総合独立課が一人ぼっちの隔離環境だと聞いた時はさすがに怒りを通り越して呆れた。

セレスフィア曰くこれが最も正体のバレない選択なのだという。

確かに能力が他人に知られるリスクは大幅に減るだろう。

しかし代わりに別のリスクが急上昇するということをあの王女様は考えなかったのだろうか？

即ち怪異との交戦。

援護する味方はおろか、情報を伝達するバックアップすらいない。

この強制スタンドプレーは危険すぎる。

いくら天遊が不可能を可能にする秘術であるといっても、それイコール万能無敵ではない。

昨日からずっと彼女の頼みを引き受けたことを後悔していた。

だが一度決めたからには貫こう、と奮起し指定された仕事場へ来た。

そしてその建物を見て辞表を書こうと本気で思った。

それほどまでにここはひどい。

王都ユーフォリアのコール地区、その片隅に存在する木造一軒家。

アドルに与えられた新事務所兼自宅。

老朽化した家は今にも崩れそうで、周りでは雑草が伸び放題になっている。

廃屋同然と言っていい。

おまけに森に面しているので近くに他の民家がない。

お隣さんまでゆうに二百メートルはある。

なぜ国で一番栄えているこの王都にこんなプチ隔離区画があるのか不思議だった。

（まさか最初の仕事が仕事場の掃除と草むしりになるとは予想できなかった）

アドルとしては心機一転、気合いを入れなおした翌日にこの現実は辛すぎる。

一応修繕費を貰ったものの、とてもじゃないが業者に依頼できる額じゃない。

自身で材料を調達して補修する他なさそうだ。

「美田を子孫に残すな」と言うが、それにしたってもう少しちゃんとした環境を用意してもらいたかった。

取り敢えず外に出て、セレスフィアの指令どおり事務所の前に看板を立てる。

『怪異対策管理局　コール支部』

立ててみるとあらためて分かるが、物凄くチープな作りの看板だ。

（こんなんで本当に誰か来るのか？　不安だ）

そう思いながら掃除のため、事務所の中に入ろうとすると

「あ、あのっ」

アドルは背後からの声に呼び止められた。

振り返ると一人の少女が立っている。

「ここって怪異対策管理局の支部であってる？」

アドルはすぐさま営業スマイルを浮かべた。

「お客様ですか？　こちらは怪異対策管理局コール支部となっております。ご用件が御有りでしたらこの支部長であるわたし、アドル・レンフィールドにお気軽にご相談ください」

自分でも驚くほどすらすら言えた。昨日の夜マニュアルを熟読した成果だ。

最近は接客する機会さえなかったため、これだけで一仕事終えたような充足感に満ち足りた。

それにしても支部長という肩書が物凄く虚しく感じられた。

なぜなら一人だから。ついでに課長でもある。だけどこれも虚しい。一人だから。

「そう。だったら早速依頼したいことがあるの。いいかしら？」

少女はこちらに近づいてきた。そこでふとアドルは少女の出で立ちに疑問を覚える。

彼女の着ている服は王都にいる普通の町娘と大差ないものだ。

ただ彼女は加えて真っ黒なサングラス、そして判りにくいが亜麻色のオール（かつら）ウィッグをつけていた。

（怪しい……）

サングラスだけならまだ分かる。

多少違和感はあっても機能的な面からすれば別段おかしいことで

はない。

しかしウィッグはどうだ。ウィッグはヘアーエクステンションとはわけが違う。

女性が短髪を長髪に変えるためウィッグを使うことは確かにある。

しかし大抵はエクステで事足りる。

そもそも目の前にいる少女は髪の盛り上がり具合から、元々かなりの髪の量であることが見て取れた。

そんな女性がウィッグを必要とする状況、それは

「失礼ですがそれは何のコスプレですか？」

アドルはとても残念な男の子だった。

「はあ？」

当然のように少女が蔑みの視線を向けてくる。

仕方がないのでアドルはもう一つ用意した答えを述べた。

「どうしてあなたが変装しているのか気になりまして」

すると少女は一瞬驚いた表情になり、すぐに口元を歪めた。

「へぇ。対怪異のスペシャリストはこんなことまで見抜けるんだ」

「昨日まで探偵やっていたからね。プロファイリングみたいなものさ」

アドルは少女の持つ一般人とは異質な存在感を感じ取り、無料の笑顔と敬語を捨てた。

「……まぁどうせ依頼する時にバレることだしいいか」

少女はサングラスとウィッグを外した。

余計な遮蔽物がなくなり、その可愛らしい容貌があらわになる。

少女は纏められていた長髪を手ぐしで元に戻す。

薄紫色……正確にはオーキッドの長髪が風に流される。

仕上げとばかりにショルダーバッグから取り出した大きな白いリボンで飾り付けた。

その姿にアドルは見覚えがあった。思わず目を疑う。

恐らく目の前にいる少女は少なくともこのユーフォリアで知らぬ者はいないほどの超有名人だ。

少女は黙ってこちらを見つめている。アドルの言葉を待っているようだ。

「……まさか本物？」

「当り前でしょ。その反応だとあたしの名前も知ってるわね」

「シリル・ティレット……でＯＫ？」

「どうしてそんなに自信なさげなのよ」

あからさまに顔をしかめた。ご不満のようだ。

「気分を害したのなら謝る。世間に疎くてね。例えこの国で人気絶頂のアイドルが目の前にいたとしても咄嗟に名前が出てこないんだ」

アドルは努めて軽い口調で言った。

「それにしてもどうしてここに？」

アドルの質問に、シリルは怪訝な顔をする。

「依頼があるからに決まってるでしょ」

もっともな返答だった。

意思の疎通が上手くいかず、アドルは言葉を選びなおす。

「そうじゃなくて、どうして本部に向かわずこの支部に来たんだ？」

「近いから」

「納得」

「でも本部に行けば良かったって思うわ」

「それも納得」

全肯定するアドルを見て、シリルはがっくりとうなだれる。

「……アンタねぇ、ここの支部長なんでしょ？」

疑いのこもった眼差し。アドルは苦笑してそれをかわす。

「今日なったばかりなんだよ。今はこのオンボロ事務所をどうやって綺麗にしようか悩んでたとこ。そして君が来た。お客様第一号が人気アイドルとは幸先いいな」

「そう。分かったわ、ありがとう」

言って、シリルはアドルに背をむけた。そのまますたすた歩いていく。

「ちょ、待ってくれ。俺に依頼があったんじゃないの？」

「悪いけどあたしは本部の方に依頼するわ」

シリルは振り返ることも立ち止まることもなく言葉だけを返す。

アドルは急いで駆け出し、シリルの隣に並んだ。

「ちょっと、ついてこないでよ」

「どうしてウチを頼ってくれないんだ」

「怪異対策管理局って国が認めてつくった機関なんでしょ。なのにあんなボロボロな建物使ってるわけないじゃない」

「つまりシリルさんは俺が偽物だと？」

「そういうこと」

「ちゃんと証拠もある」

「だとしてもあたしは本部に依頼するわ」

「頼む。こっちにも引き下がれない理由があるんだ。お願いだから俺に依頼してください！」

必死に懇願する。これも全て完全歩合制という名の呪いのせいだ。

働き次第ではメリットになるが、現状この制度はアドルの首をしめている。

数少ないお客様を他所にとられるわけにはいかなかった。

というか第三者から見ればタチの悪いセールスにしか見えないのだが。

「ああもうしつこい！だいたいアンタ……」

シリルはついに根負けしたのか、歩みを止めてアドルの方を向く。

そして絶句した。

（かかったな！！）

アドルは内心ほくそ笑んだ。

（俺の天遊技の一つ、「うるるんチワワ攻撃」が決まった！）

直視してしまったものの心を掴んで放さない脅威の人心掌握術。

その守ってあげたくなる様は悪鬼すら心変わりさせる……はずだった。しかし、

「……気持ち悪い」

シリルは毒虫を見るような目で言い放った。

まだキモーイと言われる方が良かった。

『キモーイ』がまだ多少の冗談を含ませているのに対し、『気持ち悪い』は直球だ。

それも二百キロオーバーの直球。

アドルが、まだ若い青年男子が耐えられる道理がない。しかも相手は国民的アイドル。

「ぐふっ……」

オーバーな動作でその場に両膝をつき、次いで両手をついた。

「もう俺は死ぬしかないんだ。お金だってないし。もしここに心優しく美しい女神のような人がいれば俺を見捨てるだろうか。いや、見捨てはしない。反語ッ」

「……」

「アイドルってさ、人に生きる希望を与える職業じゃん？　今ここに人生とはなんなんだっていう大きな哲学テーマにぶつかった人間がいたら助けるのが普通だよな」

「……」

「女々しいのは承知さ。下心も少しはあるさ。でも、それでも君の力になりたいんだ」

「……」

「だって君は初めてのお客様だから！」

「あーもう、分かったわよ。分かりました。　あんたに依頼するわよ。これで文句ないでしょ」

「ありがとう！」

アドルは平伏したまま礼を言った。

「ほら、早く顔をあげなさいよ。なんだかあたしが悪者みたいじゃない」

「あ、ごめん」

「……それよりもあんたはちゃんとあたしの依頼を解決してくれるの？」

「まだ内容を聞いてないからなんとも言えない……が、持てる力の全てで対処する」

「絶対よ」

「誓って誓おう」

「なにそれ。……まぁいいわ」

「とにかく事務所はまだ散らかっていてとても落ち着いて話のできる環境じゃない。場所を移すけどいいか？」

「あまり人の多いところは駄目よ」

シリルはウィッグとサングラスを再装着しながら意見する。

「それならいい場所を知ってる。変装が下手でも安心して行けるぞ」

「うるさい。一言余計よ」

「これは失礼。じゃあ行こうか」

※

王都の商業区から少し離れたさびれた通りの只中にその喫茶店はあった。

落ち着いた雰囲気の店内にはカウンター席の他に四つのテーブル席がある。

アドルとシリルはその内の一つ、入口から一番遠くのテーブルを選んで座った。

「お？　アドルじゃねーか。連れの美人さんは誰だい？　お前のことだ。彼女さんじゃあないだろう」

カウンターの奥から初老の男性が無骨な顔を出した。

分厚い胸板の前、二本の巨腕で小さなミルを使って豆を挽いている。

彼はこの店のマスターだ。

頻繁にここを利用しているアドルとは、年の差を気にせず軽口を叩きあう仲である。

「悲しいくらいご明答。依頼主さんだよ。しばらく使わせてもらっていいかい？」

「ああ。どうせ来る客はオメェみたいな常連ばっかだ。気にするな」

「ありがとうマスター」

マスターの方に向けていた顔を正面に戻すと、シリルはメニューを睨みながら唸っていた。

「どうした？」

「こんな裏通りの喫茶店なのにメニューの種類が半端ないんだけど」

「ああ。ここのマスターはいつ可愛い女の子が来てもいいようにスイーツ類が驚くほど豊富なんだ。なんでも喫茶店やる前は有名どころのパティシエだったとかいう噂もある」

アドルは自分で言いながら、この店の異質さを再認識した。これまで触れなかったが、今度その辺の事情をマスターに聞いてみようと心に留める。

「ふぅん。ジェラートはあるかしら」

「あるにはあるが高い」

ジェラートの値段が他に比べて頭一つ抜きんでている理由は単純。道具が非常に高価なのだ。

氷菓子であるジェラートをつくるためには冷凍する環境が必須。

しかし氷属性の魔法技術を転用してつくられた冷蔵庫という機械は、それ本体の価格も維持費も相当なものである。

最近は魔術に頼らない型も開発されつつあるらしいが、そんなものをこの場末の喫茶店が買えるはずもない。

まぁジェラートの値段が高かろうが安かろうがシリルには関係ないようだった。

躊躇いなくオーダーを済ませる。アドルは朝食を摂っていなかったので具沢山のホットサンドとコーヒーを注文した。

マスターが調理に取り掛かるのを確認してからアドルは話を切り出す。

「さっそく依頼について聞かせてもらおうか。天下の売れっ子アイドルを悩ませる怪異……興味がある」

「分かったわ。でもまずどこから話せばいいのかしら……」

「初めて怪異に遭遇してからこれまでの経緯をそのまま話してくれてかまわない」

「ちょっと長くなるけど、しっかり聞いてなさいよ」

「諒解」

「あれはちょうど一週間前の夜」

※

「みんな、今日はありがとーっ！」

拡声魔法が施された短い棒……マイクを通して広い広いホールを隙間なくあたしの声が埋める。

半年間に渡る全国ツアーのファイナル。

三時間に及ぶライヴは大成功。アンコールの新曲も完璧に歌い上げた。

鳴りやまない拍手と喝采。

良かった。お客さんたちは楽しんでくれたみたいだ。

心地よい疲労を感じながら、あたしはステージを後にした。

「シリルおめでとう。今日も最高だったわ」

控室に入ると真っ先に赤毛の女性があたしを迎えてくれた。

飲み物とタオルを手渡される。

「ありがとう」

あたしのマネージャー兼ボディガードのルーア・ブリッツはあたしに負けないくらい汗をかいていた。

ルーアはコンサート中、舞台袖ではなく一般客に混ざってあたし

の歌を楽しむ。

ひと月ほど前からだ。今日もいつものように踊っている姿がひと際目立っていた。

ファンクラブの応援隊長にスカウトされたこともあるらしい。

「さっ、早く着替えなさい。ルーアさんは早く飲みたくて朝から我慢してたんだから」

ルーアはあたしの衣装を無理やり脱がせにかかった。

「ちょ、やめてよルーア」

「ならあと一分で着替えなさい」

しばらくして私服に着替え終えたあたしを、ルーアは引っ張るようにして打ち上げ会場まで連れて行った。

会場には既に大勢の人が集まっていた。

あたしを支え、一緒に頑張ってきた仲間だ。

一応主賓ということで、あたしはスタッフさんたちに感謝の言葉を言って、乾杯の音頭をとった。

みんな、あたしのことを褒めてくれた。

良くやった、最高だった、また次もやろう。

嬉しくて本当に嬉しくて、だけどあたしはそれを素直に受け止めることができない。

控え目に笑い返してありがとうと言うだけ。

なんとなく喜びを表現するのが恥ずかしい。素直になりたい。でも上手くいかない。難しい。

以前ルーアにこのことを相談したけど、彼女は「まだまだ子供ね。そのうちなんとかなるわよ」と笑っただけだった。

ステージを降りたあたしは自信に満ちた、誰にでも笑顔を振りまけるアイドルでいられなくなってしまう。

ルーアはそれでいいって言ったけど、あたしは嫌だった。

隣を見るとルーアがおいしそうにビールを呑んでいる。既に中ジョッキ四杯目だ。

彼女はマネージャーであるとともに、武術と魔術に長けた頼もしいボディガードなのだが、魔術を習得した理由が「アセトアルデヒドを急速分解できる術を使えるようになりたかった」からだとか。

でも、とあたしは思う。

出会ったばかりの頃の彼女はそれほどお酒好きでなかったと記憶している。

それが今のようになったのはひと月ほど前くらいからだろうか。

最近は余裕が出来てきたからお酒を楽しめるようになったのかもしれない。

もしかしたらライヴを全身で楽しむようになったことも関係するのかも。

とにかく、最近のルーアはわずかだけど変化が見られた。

以前よりもあたしと長い時間を過ごすようになり、どこか適当だった仕事も真面目にこなすようになった。

これからもずっと一緒にやっていきたいと思う。

それにしてもお酒の呑めないあたしはいつも困ってしまう。

酔っ払い達が溢れるこの場をシラフで乗り切る。それが本日最後の仕事だった。

※

「疲れてるだろうから体を温めてすぐに寝なさいよ。じゃ、お疲れ様ー」

ルーアはあたしをアパートメントまで送ると帰って行った。

その足取りはしっかりしている。魔術って本当にすごいと思った。

ちなみに彼女もこの建物に住んでおり、私は五階、ルーアの部屋はちょうど真下の四階だ。

あたしは熱いシャワーを浴びて、髪を乾かして、それからふかふかのベッドにもぐりこむ。

ここにはあたししかいない。

家族は地方にいる。今回のツアーであたしの故郷はまわらなかった。

次回はまわれるようルーアに相談してみよう。

そんなことを考えるうちに瞼が重くなってきた。

あたしは溜まった疲れに身を任せる。ほとんど間をおかずにあたしの意識は深い闇へと落ちていった。

※

最初に感じたのは奇妙な圧迫。

「えっ……あ、あ」

無意識に目を開けると、ぼやけた視界の隅で動くものを捉えた。

瞬きをする。暗闇に紛れて何かの気配を感じ取る。

それを認識するとあたしの世界は急速に鮮明になり、自分の真上で滞空しているものの実態が見えた。

大人の男よりも一回り大きな肢体、人間にはない黒の翼、そして気づいてしまった。

……この得体の知れない化け物は首から上に何もない———

――

「っ！」

あたしは思い切り悲鳴をあげた。

右手でシーツを放り投げ、白い波が化け物の視界を塞いでいる間に裸足のまま部屋を飛び出す。

転がるように階段を駆け下り、ルーアの部屋の前にたどりつくと、痛みを忘れるくらい何度もドアを叩いた。

「ルーア！　ねぇルーア！」

ここに居続ける勇気が恐怖に呑まれそうになった時、ようやくドアが開いた。

「どうしたのよー、こんな真夜中に」

目をこすりながらルーアが出てきた。

あたしはすぐにルーアの腕を掴む。

「ば、化け物が、えっと黒い変なのがあたしの部屋にっ」

耳に届くあたしの声は涙声。

切羽詰まったあたしの様子に異常を感じ取ったのか、すぐにルー

アの表情が変わった。
タンクトップにショートパンツ姿のルーアはどこからともなく二丁の拳銃を取り出した。
そしてあたしを自分の後ろに隠す。
ちょうどさっきの黒い化け物が四階に降りてくるのが見えた。
「私に掴まって！」
あたしはすぐにルーアの言うとおり彼女の体にしがみついた。
直後、あたしの体は風を切って落下していた。
ルーアがあたしを抱えて飛び降りたのだ。
ほとんど衝撃を感じさせず着地すると、あたしと距離をとった。
黒の化け物がこちらを追いかけて飛んでくる。
「すぐに終わらせるから」
ルーアはそう言って駆け出した。
両手の拳銃を反転させて逆手に持つ。

突然、その銃身が倍以上に伸びた。

二丁の銃の形状はまるでトンファー。

ルーアは風のように素早く化け物に接近すると二本のトンファーを振るった。

振るったんだと思う。あたしには見えなかったけど、化け物がひしゃげ、数メートルの高さまで吹っ飛ばされた。

その間にルーアの右手に魔力が集まり光が収束される。

「喰らいなさい」

ルーアの周囲に無数の氷柱が現れ、その全てが化け物にむかって飛んでいった。

しかし化け物は氷柱に触れる前に黒い霧となって消えてしまった。

軽く舌打ちをしたルーアがこちらに歩み寄ってくる。

「大丈夫？」

「う、うん。それよりも今の……」

「ごめん。逃げられた」

「そ、そう」

「ごめんねシリル。私のミスだ」

「そんなことないわ。助けてくれてありがとう」

「シリル、悪いけど明日からアンタの部屋に泊めて。またあいつが来たら今度こそ倒すから」

そう言ってルーアはトンファーを回転させると、私に笑ってみせた。

※

「ってなカンジなのよ」

ちょうどシリルがジェラートを食べ終えたところで彼女の回想は終わった。

「カンジって……やけに軽く言うな」
「仕方ないでしょ。四六時中アレに怯えていられるほど暇じゃないの」
「そうか。ちなみにこの一週間のうちに何か起こったか？」
シリルは気だるそうにうなづく。
「起こるも何も、毎晩来るのよ」
「来るって……その化け物が？」
「そう。日が変わらないうちに来るの。でもルーアがその度に追い払ってくれるから大丈夫」
「大丈夫じゃないだろ。そのルーアさんだって大変だろうし」
「そうなのよ〜。聞いてよ青年。シリルったら私に任せてとっとと寝ちゃうのよ」
「へぇ。やっぱりトップアイドルにもなると常人とは神経の図太さが違いますね」
「なっ……聞き捨てならないわ。っていうか……」
シリルは乱暴に椅子から立ち上がると、勢いよくアドルの隣を指さした。

「どうしてルーアがここにいるのよーっ！！」

アドルの隣にはスレンダーな体つきの女性が座っていた。

赤毛のショートカットから快活な印象を受ける。

どうやら彼女がシリルの話に登場したマネージャー兼ボディガードのルーアらしい。

歳はアドルよりいくつか上に見えた。

「実はね、シリルが知らないだけで私は昔からこの喫茶店の常連なのよ。いつものようにここに来たらシリルがカッコイイ男の子と楽しそうに話してるから気になって盗み聞きしてたってわけ」

「いい趣味じゃないわね。それとこいつの何処がカッコイイのよ。眼科行った方がいいんじゃないの？」

「ちょっと、本当のことというと彼が可哀想じゃない」

「いいんですルーアさん。罵倒には慣れてますから。あとついでにあなたもヒドイですよ」

「ごめんごめん。ところでキミは？　シリルとはどういう関係？」

ルーアはシリルの隣に席を移すと、テーブルに身を乗り出して尋

ねてきた。

その瞳には溢れんばかりの好奇心が宿っている。

「自分は……」

「ただの変人よ」

アドルが答える前にシリルが横槍を入れた。どうも彼女とは相性が悪いらしい。

「俺はアドル・レンフィールド。シリルさんに依頼された怪異対策管理局員です」

途端、ルーアの表情が強張った。

じっとアドルの顔を睨む。その眼にはかすかな殺気すら感じ取れた。

「あの……俺が何か？」

アドルが遠慮がちに尋ねると、ルーアはハッとした様子ですぐに元の彼女に戻った。

「ごめんごめん。なんだか物凄く胡散臭そうだったから、シリルが騙されてるんじゃないかと疑っちゃった」

ストレートな物言いだったが、アドルは不思議と不快に思わなかった。

それにもし自分が彼女の立場だったら同じことを考えていただろう。

「今日から活動を始めたのでまだ知らないのも無理はありませんよ」

「でもよくシリルは知っていたわね」

「国がようやく怪異の対処に乗り出したんだもの。知っていて当然よ」

「まぁそんなワケでシリルさんが我が支部のお客様第一号です」

「へぇ、シリルがねぇ。なんだか複雑な気分なんだけど」

「あんまり身内に頼りたくなかったんじゃないですか？　プライド高そうだし」

「まだまだ子供よね～」

「ちょっとあんた達、本人がいる前で何勝手言ってんのよ」

「でもシリル、せめて一言でも私に言ってくれればよかったのに」
「……ごめん。もちろんルーアには感謝してるわ。だけどこれは私の問題だから、これ以上迷惑かけたくなかったの」
シリルは今までの勢いはどこへ行ったのか、急にしおらしくなった。
「可愛いですね」
アドルの本心だった。だが余計だ。
「でしょー」
ルーアもニヤニヤしながら同意した。無論余計だ。
「あんたたちねぇ……っ」
からかわれたのがよほど気に障ったのか、シリルはわなわな震えていた。
顔には幾らかの羞恥を滲ませている。

その迫力は背後に阿修羅がいると錯覚させるほどだ。

危機を悟ったアドルはルーアに目配せして助けを求める。

しかし彼女は立ち上がるとテーブルに紙幣を置き、

「シリルはオフだけど、私は仕事が残ってるの。アドルくんだっけ、あとは頼むわね」

「ちょ、待ってくださいよルーアさん」

「じゃあねー。シリルは夜までに帰ってきなさいよー。お姉さん、朝帰りは認めませんから！」

驚くべき速さで戦略的撤退を完了した。

後に残るのはどこか気まずい男女二名。

状況を打破するため、アドルは一つの提案をした。

「と、取り敢えず現場検証から始めようか」

※

その後、嫌がられながらもシリルの部屋をくまなく調べたが怪異の手掛かりとなるものは欠片も見つからなかった。

昼食を摂ってから捜査を再開するものの、結果は変わらず。

王立図書館でシリルの記憶に一致する怪異を探したが、数が多く絞り切れなかった。

そうこうしている内に時間だけが無駄に過ぎていく。

なんの成果も挙げられないアドルに対し、シリルは不満を隠そうともしない。

アドルは自分の不甲斐なさを痛感し、嘆きたくなる。

仕方がないので最後の手段を取ることになった。

王都の中でもアンダーグラウンドな店が集う区画の一軒に憂鬱を伴って入店する。

シリルは外で待たせておいた。

すぐ側に騎士の詰め所があるので安全なはずだ。

「おいエディ。俺だ」

薄暗い店内は決して広くない。

細長い室内のほとんどは雑多なものが形成した山で塞がっている。

かろうじて落ち着いているのは一番奥に存在するカウンターの周辺だけだ。

そのカウンター越しに一人の男がいた。

エディ・カーソン。

アドルが探偵時代から世話になっている情報屋だ。

まだ業界では若手の部類に入るものの、その仕事ぶりは一級だと聞く。

しかしアドルは彼と仕事をして成功したためしがない。

故に顔を合わせれば罵り合いが始まる。

どちらかというと苦手な部類に入るだろう。

しかしどうしても憎めないところがあり、交わした約束は必ず守ってくれる。

数ある情報屋の中で最も信頼しているのもまた彼だった。

「なんだアドルかよ。どうした？　金はかさねーぞ」

「違う違う。マイフェイバリットライトアームのエディくん。俺に情報ぷりーず」

「帰れ厄病貧乏探偵」

「そんなつれないこと言うなよ」

「オレがお前と組んで得したことがあるか？　お前が絡むと大赤字の確立百パーなんだよこっちは」

「まぁそう言うなって。今回は絶対後悔させない」

「そのセリフを聞いたのはこれで十三回目だ。不吉すぎる」

「……分かった。邪魔したな」

その言葉を聞いて、エディは明後日の方向に向けていた顔をアドルに向けた。

「今日はやけに素直だな。いつもなら小一時間オレに泣きついてくるくせに」

「そうだな。昨日までの俺なら確かに格安で情報を提供してくれるお前に頼るしかなかっただろう」

「……まさかお前」

「これからはこういった料金も全て経費で落とせる！　別にこの店に拘る理由はないのだよエディくん！」

「じゃあとっとと帰れ」

「冗談だよ。とにかく金の心配はいらないから力を貸してくれ」

「それなら構わないが……アドル、お前を飼ってくれる気まぐれな主人が誰かだけは教えろ」

「国」

途端、エディ表情が固まった。

それから抑揚のない声で

「ありえない信じられないこいつがアドルが国の犬になっただとあの日の誓いはどこへいったオレたち二人で世界を変えようと夕日を見ながら語った思い出はすでに過去のものなのかだとしたら取り残されたオレはどうすればいいんだ畜生畜生畜生め」

呪詛を吐き続けた。

三分後。

ようやく誰に向けていたのか不明な演説が終了し、エディは正気を取り戻した。

「ああ、なんてこった。この国は終わった」

「まだ言うか」

「だってお前みたいな奴が公務員ってことだろ？」

「めちゃくちゃ差別発言だぞ、それ」

「……お前と仕事をして絶対に後悔しないんだな」

「ああ。させない」

「もし後悔することになったら絶交だぞ。誓えるか」

「ああ。誓って誓おう」

「よし分かった。ならどんな情報でも売ってやるぜ」

「ありがとう心の友」

「よせよ。照れるじゃないか」

「しかし」

「いいかアドル。友情は」

エディがニッと笑った。アドルもそれに笑い返す。

「見返りを」

一呼吸置いて

「「求めない！」」

二つの声がきれいに重なった。と同時に固い握手を交わす。

男二人がこのやりとりに満足していると、誰かが店内に入ってくる気配がした。

「ちょっと、いつまで待たせる気！？　さっきから何度も声かけられて困ってるんだけど」

不遜な態度でやってきたのはシリルだった。

「なっ……にいいいいいいいいい！？」

唐突にエディが驚きの声をあげた。いや、これはもはや絶叫の域だ。

「な、なんだどうした！？　びっくりしただろ！」

「バカな。オレは夢を見ているのか。まさか、まさかっ、シリルたんが目の前にいるだとっ！？」

「シリルたん！？」

「ええ。そのシリルよ変態さん」

「なんで落ち着いてるんだよ？」

「同じような人間は大勢見てきたから」

「シリルたんに変態って言ってもらえた！！」

「お前はお前で大丈夫か！？」

アドルはエディがここまで取り乱す姿を見るのはこれが初めてだ。

まさかエディがシリルのファンだったとは正直かなり意外である。

「おいアドル貴様、どうしてシリルたんがここにいるのか十文字以内で説明しろ」

「アイドルは俺の依頼人」
「いったいどうして？」
「彼女は正体不明の黒い怪異に狙われている。ここを訪ねたのはそいつに関する情報が欲しかったからなんだ」
「冗談はよせ」
「アドルの言うことは本当よ。あたしは一週間前から毎晩襲われかけてるわ」
「バカ……な」
「取り敢えず深呼吸して落ち着けバカ」
「ヒッ、ヒッ、フー」
「それはラマーズ呼吸だ！」
「ネタ古くない？」
「アドル！情報を恵んでやってもいいが条件がある」
「いきなりなんだよ」
「シリルたんにオレを踏むよう頼んでくれ！」

エディの目が血走っている。鼻息も荒い。

彼が特殊な性癖を持っていることは誰の目にも明らかだった。

「お前さっき見返りを求めないとか言ってなかったっけ？」

「前言撤回。頼むアドル、このとおりだ」

エディはいつになく興奮した顔でカウンターの上に飛び乗り、土下座した。

アドルはこの状況についていけない。

エディのことは前々から変態（そもそも変態じゃない情報屋はいない）と思っていたがまさかこれほどまでとは知らなかった。

人の嗜好にわざわざ口を出す気はない。

しかしこう目の当たりにすると、どうしていいのか分からなくなる。

アドルは早い段階で自己解決が困難だと判断した。

かくなる上は人身御供でしのぎきる。

「シリル、こいつのこと足蹴にしてくれ」

シリルにキラーパス。

「嫌よ！」

即答だった。

「お前の事件なんだぞ。お前が頑張らなくてどうする」

「う……た、確かにそうだけど、あたし人を踏んだことなんてない！」

「踏まず嫌いはいかんぞ。これを機に新たな快感に目覚めるかもしれないし」

「最っ低！！」

シリルは耳の先まで顔を真っ赤にすると、キッとこちらを睨んでくる。

「そうだ。その怒りだ。それをそのままエディにぶつけ――――」

最後まで言い終える前にシリルの鋭いローキックがアドルの右脚を直撃した。

あまりの威力にアドルは床に崩れ落ちる。

「バカッ」

シリルは憤りをこめて吐き捨てると、そのまま店を出て行ってしまった。

「なんなんだよもう……」

アドルが痛む脚をさすりながら起き上がろうとすると、

「アドルくぅ〜ん」

頭上から、額に血管を浮かび上がらせた気持ちの悪い生物がこちらを見下ろしていた。

その目は完全にイッている。

「どうしてオレじゃなくてテメェが踏まれるんだよ、チクショー！！」

エディの腕が一直線にアドルの首へと向けられた。

逃げる間もなく、一瞬でチョークスリーパーをかけられる。

ミシミシと骨が軋み、気管が圧迫される。だんだんと意識が遠のいていく。

（……なんなんだよ、ホント）

そしてアドルは抵抗する間もなく気を失った。

※

（もう……何が対怪異のプロフェッショナルよ。バカ！役立たず！）

シリルは重い足取りで街を歩いていた。

周りの喧騒とは裏腹に彼女の気持ちは沈んでいる。

それもこれも全てあの化け物のせいだ。

世界が橙に染まっていく中、シリルは立ち止まった。

日没が近い。夜になればまたいつものようにあの化け物が現れるだろう。

早く帰ってルーアと合流する必要がある。

しかしシリルは踵を返すと、もと来た道を早足で戻っていく。

「あんな奴でもいないよりはマシでしょ」

例えルーア一人でも自分を守ってくれるだろう。実際この一週間はずっと安全だった。

だがそれは根本的解決に至っていない。

ルーア一人で駄目ならアドルを加えて二人で対処すればなんとかなるかもしれない。

シリルはそう考えていた。

やがて暗い裏路地にさしかかる。

ここを抜ければさきほどまでいた情報屋だ。

視界の奥に目的の建物が見え安堵する。

その時だった。

「え」

重力を感じない。踏み出した右脚が地につかなかった。

「なっ……」

黒い何かがシリルの両脇を支えていた。

シリルはほぼ反射的に振り返る。

「っ！？」

驚愕に目が見開かれる。別段押し殺したわけでもないのに、口からはろくな悲鳴が出なかった。

目の前には頭のない黒い奇人がいた。

状況を把握する前にパニックの波が押し寄せる。

「放して！！放しなさいよ！！」

必死にもがくものの、だんだん地面から離れていく。

すぐに色とりどりの屋根の絨毯が広がり、やがてそれすら遠ざかる。

もう声は届かないだろう。それでもシリルは叫ばずにはいられなかった。

そして黒い翼は悲痛な叫びを伴って、その場を飛び去った。

※

「おい！おいアドル起きろ！！」

「う～ん……あと三時間だけ」

「長ぇよ！！」

体がゆさぶられている。というかほとんど蹴られている。

アドルが仕方なく目を開けると、そこには顔面蒼白のエディがいた。

「大変だアドル」

「何が？お前の顔が？」

まだ意識がハッキリしないアドルは適当に返す。しかし次のエディの言葉で完全に覚醒した。

「シリルたんが襲われた！」

「何だって！？」

全身が凍りつく。鈍器で頭を殴られたような衝撃が体中を駆け巡る。

（なにをやってるんだ俺は……！）

無理やり自分に依頼させて、しかし何の成果も挙げられず、挙句の果てには依頼人を危険に晒してしまっている。

最低だ。屑で間抜けで甲斐性なしの糞野郎だ。

だが燃えたぎる血が巡るのはあくまで首より下まで。冷静は保た

れていた。

今は自虐も後悔も置き捨てる。彼女を助け出すことが最優先だ。

「エディ、詳しく教えてくれ」

「正確には連れさられた。多分、さっき言ってた怪異の仕業だ」

「どうして分かる？」

「シリルたんがここを出て行く時にさりげなく観測念糸（かんそくねんし）を伸ばしておいた」

観測念糸とは情報屋には必須の魔術だ。

自分の意識とリンクさせた不可視の糸を対象に伸ばすことによってその周囲の状況を見たり聞いたりできる。

もちろん適当に伸ばしてもいい。

一般的なもので念話というテレパシーのような感応術と似ているが、観測念糸はその情報量が桁違いだ。

よって情報が資本となる情報屋はこれを自在に操ることができて初めて一人前と言える。

強力だがプライバシーを侵害する可能性がある術なので規制が厳しいのが現状だ。

当然、情報屋の大半はそれを無視している。エディもその内の一人である。

「でかした……と言いたいところだが、なぜあらかじめ観測念糸を伸ばしておいた？」

アドルはエディを睨んだ。エディは嘆息しながら大袈裟にホールドアップする。

「オイオイ、オレを疑ってるのか？　そんな下心があったわけじゃねぇよ。保険だ保険」

例えエディが嘘をついていたとしてもアドルにそれを見抜くことはできない。

探偵時代に培ったわずかな観察力では、駆け引きを生業にするエディを看破するには到底及ばないのだ。

アドルは疑念を振り払って思考を切り替える。

「まぁその話はこれが解決してからだ」

「そうだな。オレはここから指示を出す。お前はとっととシリルたんを助けてこい」

「了解。頼むぜ相棒」

アドルは弾丸のように店を飛び出そうとし、そこでふと立ち止まった。

方向転換。

それからエディにちらりと視線を送って言う。

「武器貸してくれ」

ｔｅｍｐｌａｔｅ：２　初めての依頼（後書き）

シリル一人称の出来がひどいのでそのうち他も含めて修正したいと思います。

第三話予告とか

読まなくてもいい蛇足コーナー第二回

エディ：天遊人第二話、どうだったかな？　まさか一気に三人もキャラが増えるとは……流石にオレの情報網でも掴めなかったＺＥ☆

アドル：どうしてお前いるの？

エディ：レギュラーだからに決まってんだろ。ここは少しでも読者様にオレを印象づけるチャンスだと思ってな。忙しい仕事の合間を縫って来てやったＺＥ☆

アドル：アイドルの追っかけって忙しい仕事に入るのか。羨ましいよ

エディ：それにしても第二話も天遊について何も分からなかったな

アドル：大人の都合というものがあってだな……

エディ：作者の力量不足だと認めろ

アドル：ミトメタクナイ、ミトメタクナイ

エディ：それよか、シリルたん可愛かったな～

アドル：アイドルって書くの難しいな

エディ：もっとアイドルのコンサート行けよ

アドル：ロックフェスばかりでごめんなさい

来たぜ閑話休題

エディ：早くもネタが尽きたので新コーナー「ツッコミ目安箱」だ！

アドル：どんどんぱふぱふー

エディ：これは読者の皆様から寄せられたツッコミを全力でピッチャー返しするコーナーだ

アドル：ラジオかよ……しかもその企画には致命的な欠点があるぞ

エディ：オイオイオイなんだよアドル。オレをディスってんのか？

アドル：いいかよく聞け。この企画は前提条件が崩れている。

エディ：どゆこと？

アドル：ツッコミ感想を書いてくれる読者がいない

エディ：……

アドル：……

エディ：いつか出来たらいいな

アドル：（むしろツッコミが来ない方がいいんじゃないのか？）

※

アドル：さて、そろそろ次回予告の時間だな

エディ：派手なの頼むぜ

アドル：連れ去られたシリルを追ってアドルは夜を往く。なぜシリルが狙われるのか、あの黒い化け物はなんなのかが明かされる。そして秘術・天遊がようやくお披露目！

エディ：ということは次回は戦闘回？

アドル：ようやく天遊の説明ができるよ……

エディ：それじゃあ今日はこの辺で

アドル：さようなら～

第三話予告とか（後書き）

いまのうちに謝っておきます。
次回はクトゥルフ神話ファンには受け入れられない内容になりそうです。

ｔｅｍｐｌａｔｅ：３　夜を駆ける（前書き）

当初予定していたものとは１８０度違う内容になってしまったため
非常に時間がかかりました。
相変わらず読みにくい&だんだんと一話あたりの量が増えてる……。
精進せねば。
※あとこの物語のジャンルは現代ファンタジー（？）になりました。
パラレルワールドです。大目に見てくれると助かります。

ｔｅｍｐｌａｔｅ：３　夜を駆ける

ｔｅｍｐｌａｔｅ：３　夜を駆ける

まだ春になったばかりということで夜の帳が下りるのは早い。

今宵は満月。

アドルはただひたすら街灯の光にそって石畳の道を往く。

≪シリルたんは北門を抜けた先にある森にいる。知ってるだろ？魔の森って呼ばれてるところだ≫

アドルに繋がれた魔力で構成された不可視の糸、観測念糸を通してエディの声が脳に直接響く。

「了解。あとシリルたんはやめろ」

≪しょうがねぇな。じゃあ姫とでも呼ぶか≫

「ルーアさんへの連絡は済ませてくれたか？」

観測念糸はあくまで術者と対象が繋がる魔術だ。

そのため第三者との連絡はエディの仲介を挟まなければならない。

≪おうよ。お前の言う住所に念糸を伸ばしたらしっかり姫のお帰りを待ってたぜ。今はお前とは別に森へ向かっている。それにしても滅茶苦茶キレてたぞあの女≫

「大事な人を危険に晒したんだ。ぶん殴られる覚悟はしてる」

＜そうか。それはそうと例の怪異の正体が掴めたぜ＞

「本当か？」

アドルはようやく門を通過すると、一旦立ち止まって呼吸を整える。

焦燥が最適なペースを狂わせ、必要以上に体力を持っていかれていた。

体力面、精神面ともに鍛錬を怠っていた結果だ。

無為に過ごした日々が悔やまれる。

≪個体名“ナイトゴーント”。黒い体と翼、ゴムっぽい質感、首なし、とお前が姫から教えてもらった特徴に当てはまってる≫

アドルは走るのを再開しつつエディの話に耳を傾ける。

≪中級クラスの怪異で、攻撃方法はくすぐりだ≫

アドルは思わずその場で転倒しかけた。

「頼むから真面目にやってくれ！」

アドルはどこにあるのか分からない念糸にむかって怒鳴りつける。

今は状況が状況だ。

そんなくだらないジョークに付き合う余裕は小さじ一杯分もない。

むしろ正気かと疑いたい。

だがしかしエディの態度は崩れなかった。

≪よく聞け。信じられないかもしれないが、ヤツは本当にくすぐりで対手を倒すらしい。くすぐりによってその正気を吸うように奪い、最終的にはくすぐられた者の心は死に、冥界の闇に囚われることになる。ヤツについて書かれた文献のどれもにそう記されてる≫

「それが真実なら……恐ろしくシュールな光景なんだろうな」

アドルは頭痛に顔をしかめた。

ますます謎が増えていく。

なぜシリルが狙われるのか。なぜ彼女を襲う怪異がナイトゴーントというふざけた奴なのか。

考えれば考えるほど思考の糸が絡まり、結局なにも分からないという事実に行きつく。

これ以上は脳に回す酸素が惜しい。

アドルは走ることだけに集中する。

ほどなくして森の入口にたどりついた。

木々の生い茂る森の中では月明かりの案内は期待できそうにない。

アドルは短く呪文を唱えると下級精霊を呼び出した。

これは老若男女誰もが扱えるもので、魔術ですらない。

精霊の好むメロディーを口ずさめば勝手にどこからか現れるのだ。

その戦闘能力は皆無。用があるのは彼らが発する輝きだ。

アドルは綿のような丸い精霊を自らの肩に乗せて森へ進む。

精霊の輝きが道なき道を照らす。

「シリルは今どうしてる？」

≪気を失ってる≫

「呼びかけることはできないのか？」

≪さっきも言ったが彼女の周囲に強力なジャミングがかけられている。こっちは念糸を保つのに精一杯でそんな余裕はない≫

「そうか。それもそのナイトゴーントの仕業か？」

≪それはないな。恐らく人間……なんらかの術士によるものだ≫

「って、ちょっと待て。ということは今回の事件は単純な怪異事件なんかじゃなく、人為的なものだっていうのか？」

≪可能性は十分ありえるな。一応そっち方面の情報にもアプローチしてみるわ≫

「頼んだ」

アドルは込み上げる不安を振り払うように、ただひたすら道なき道を駆け抜けた。

※

シリルが瞼を持ち上げると、そこは暗い森の中だった。

「え？　ここ……どこ？」

自分の置かれた状況が掴めないシリルは、記憶の糸をたどる。

現状を把握できるだけの材料を集めるまで大した時間はかからなかった。

（そうだ。あたしは化け物に捕まえられて森に連れてこられて……）

シリルはハッとなって立ち上がると、一番近い巨木に背を預け、周囲を見回した。

暗がりの中に浮かぶのは無数の木。それだけ。

あの黒い化け物の姿は何処にもなかった。

しかしこれでもう安全だと決めつけるのはいささか早急すぎる。

今はまだ生きながらえているが、いつまたあの化け物が現れるか分からなのだ。

いや、そもそもあの化け物が現れなかったとしても、無事にこの森から出られる保証はどこにもない。

シリスは家路を失った迷子のようにその場に崩れ落ちると小さな嗚咽をもらし始めた。

どうして自分がこのような目に遭わなければならないのか。

もしかしたら幸せな日々が長く続きすぎたのかもしれない。

確かにトップアイドルになるための道は辛く過酷なものだった。

幾度となくライバルたちと熾烈な争いを繰り広げたりもした。

努力を怠ったことはない。むしろ人の二倍三倍の努力を自分に課せ、実行してきた。

それでも実力だけで昇っていけたわけではないとシリルは自覚している。

今の自分が得ているものは運命のきまぐれか、はたまた神様の悪戯か、強運と偶然が重なりあった結果だった。

（だから……幸せを返さなくちゃいけないのかな？）

人の幸福も不幸も決して増えることはない。そして減ることもない。

幸福があるのは不幸があるから。不幸があるのは幸福があるから。

幸福の次に不幸が来て、またその次に幸福が来る。この繰り返し。

シリルは自分に不幸の順番が来たのだと妙に納得した。

納得したが、しかし彼女はそれを認めなかった。

「あたしはまだまだやりたいことが沢山あるの。こんな簡単に幸福と不幸を清算して、ハイそうですかって人生まで諦められるわけないじゃない」

震える足に喝を入れ、森を抜けるため足を踏み出したその時だった。

「ああ、起きた？」

背後から声がした。シリルは己の心臓が大きく脈打つのを知覚する。

「あ、あ……あ」

意味を持たない音が艶やかな唇の隙間から漏れる。

細い両脚はいつの間にか震えを取り戻していた。

「怖がらないで。私はシリルの味方だよ」

シリルをおびえさせる声の主は背の高い男だった。

年齢は四十～五十代ほどか。本当はもっと若いのかもしれない。しかし男の風貌はあまりに無茶苦茶だ。

長身痩躯にボサボサの白髪、爬虫類を連想させる顔つき、擦り切れた灰色のコート、そのどれもが尋常ではない不気味さを醸し出し

ている。

何よりその表情がたまらなく恐ろしい。

こちらを舐めまわすような視線と下卑た笑み。

シリルは生理的にその男を受け入れられなかった。

例え彼と会ったのがこのような非日常ではなく、ごくごく普通の日常でも結果は変わらないだろう。

そしてシリルはハッとした。

「あ……あ、あ、あんたは、あの時の……？」

シリルは思い出した。

昨年の夏、陽炎ゆらめく昼下がり。

炎天下の中で行われたシリルの握手会にこの男はいた。

今でもはっきりと覚えている。

彼は今とまったく変わらない出で立ちで列に並んでいた。

そしてやがて彼の番がやってきた。

シリルは彼を一目見、総毛立ち、それでもプロとして、自分を応

援してくれるファンのために、にこやかな笑顔と共に右手を差し出した。

その手をこの男は、「よぉく味あわせてください」と手に取ると一心不乱に舐めまわし始めたのだ。

流石のシリルも一瞬、何が起きたのか理解が追いつかなかった。

すぐに待機していたルーアが異常を察知し、乱暴に男を挽きはがし、そこを警備員が取り押さえた。

その後、シリルのショックが大きすぎたため握手会は中止。

あの日の出来事は精神的外傷になりかねない苦い思い出として長い間、彼女の心を蝕み続けた。

しかし最近になってその記憶もようやく薄れてきていた。

忘れかけていたというのに。

「どうしてここにっ……」

言ってから今更になってシリルは気づいた。

男の後方。闇に紛れてこちらを向く猫背の化け物。

あの化け物だ。

シリルの頭の中で幾つかの欠片がぴったりとはまる。

もう疑う余地はなかった。

（あの男があの化け物を使ってあたしをここに連れてきたんだ……！）

シリルは男のいる方とは逆に走り出した。

「待って！ねぇ、待って！」

男の悲痛な叫びが追ってくる。

待つはずがない。待つわけにはいかない。待ってどうなるというのだ。

心に芽生える恐怖の芽をつぐむように一歩一歩力強く地面を蹴って走る。

後方を振り返ると男が必死の形相で追いかけてきていた。

「もうっ、ヤダぁっ」

いつ心が折れてもおかしくなかった。

こみ上げる恐怖からシリルの大きな瞳に涙があふれる。

視界がぼやけ、周囲の暗闇も手伝って完全な盲目状態となる。

一歩先の景色さえ目視できない。

それが命取りだった。

「きゃっ」

シリルは剥き出しの根に足を取られ、何が起きたのか分からないまま勢いよく転んだ。

もう、コートの男は目前にまで迫っていた。

立ち上がろうとするが足首に痛みがはしる。

捻挫してしまったようだ。

「もう逃げられないよ」

いつの間にか追いついていた男がゆっくりとシリルに手をのばした。

※

≪アドル！≫

「どうした！？」

≪姫の意識が回復したようだ≫

「本当か？」

≪ああ。これからコンタクトをとってみる≫

「頼む！」

アドルは心の中に光明が射すのを感じた。

シリルは生きている。その事実が何よりも嬉しい。

直接会ったのは今日が初めて。

お世辞にもいい出会い方だったとは言えない。

彼女はアドルを嫌悪していたし、アドルもアイドルの実像を目の当たりにして気落ちいていた。

アイドルだからか、それとも元々の気質なのか、傍若無人に振る舞うシリル。

そんな彼女を腹立たしく思うこともあった。

しかし出会ってしまった。

言葉を交わしてしまった。

彼女の赤くなる顔を可愛いと思ってしまった。

それだけで十分。他に理由はいらない。

シリルを助けるという強い想いが芽生えていた。

依頼されたからじゃない。

アドルがシリルを一人の人間だと知ったからだ。

「どうだ？　連絡はとれたか？」

逸る気持ちを抑えてエディに訊く。

返ってきたのは苛立たしげな短い舌打ちだった。

≪クソッ！　完全に観測念糸をかき消された！≫

「何だって！？」

≪なにか分からないがヤバイ奴が姫のすぐ側にいる！そいつが念糸を断ち切りやがった≫

エディは先ほど「念糸を妨害されている」と言った。

しかし今度は完全に断ち切られたのだ。

同一犯によるものか。

そう考えるのが妥当だろう。

ただこれだけはアドルにも断言できた。

「めちゃくちゃヤバイってことだな！！」

≪姫のところまでほとんど距離はない。急げアドル！≫

「ああ！」

≪それともう一つお前に伝えなくちゃいけないことがある≫

「なんだよこんな時に！」

≪いや、オレの思い違いならいいんだけど――――――≫

アドルはエディの話を黙って聞き、

「もし、もしだ、それが本当で俺の考えが間違っていなければ……」

≪ああ≫

「シリルとルーアさんが危ない！！」

※

「っっ！」

シリルは身を竦めて瞳を固く閉ざした。

一秒たち、五秒たち、十秒経った。

いつまで経っても男の手は自分にとどかない。

恐る恐る目を開ける。

目の前には自分を庇って立つ背中があった。

その姿を認め、シリルは歓喜の声をあげる。

「ルーア！」

どこからともなく現れたルーアが男に銃をむけていた。

その銃口は真っすぐ男の頭にポイントされている。

引き金にそえる指に、躊躇いは欠片も感じられなかった。

「もう大丈夫だからね」

「あ、ありがとう」

「礼なら後で言って。取り敢えずコイツを片づけなくちゃね」

男は己に迫る危機を感じ取ったのか、正面を向いたまま地を蹴って後退した。

「逃がさない！」

ルーアは二挺の拳銃を発砲する。

だがそれは全て男のコートに弾かれた。

「防弾コートを下級奇術で強化か。素人が考えつきそうなことね」

双銃が光を纏う。

それは魔器と呼ばれる魔力を内包した特殊な武器が発する光。

銃身が伸び、打撃武器としての能力が付加される。

“バレルチェンジ”。それがルーアの持つ魔器の特性だった。

仕上げとばかりそれぞれ銃口から魔力で形成された刃が出力する。

「このガンダガーならそんなコート紙切れ同然よ」

ルーアは男に言葉を投げかけると、風のように素早く接敵した。

そのまま横薙ぎに一閃。

宣言どおり、コートが容易く切り裂かれた。

男は飛びずさって下級魔法を発動するが、天からの雷撃をルーアは軽やかな動きでかわす。

お返しとばかりにルーアは呪文を詠唱。

冷気の波が地を這って男に迫り、両膝ほどの高さまでを完全に凍結させた。

「くっ」

男は呻き、脚の自由を取り戻そうとするが、逆にバランスを崩して地面に手をついてしまう。

「ナイトゴーント！」

男は焦りをあらわにし、佇む化け物に助けを求めた。

待機していたナイトゴーントが主の命を受け、ルーアを襲う。

「もうアンタとやるのは飽きたのよ」

一瞥もくれずにルーアは銃を振るった。

常人には捉えられない斬撃がナイトゴーントを両断する。

勝負は決した……かに思えた。

しかしルーアは立つことすらままならない男の元に歩み寄ると、その頭を左足で踏みつけた。

「よくもシリルに手を出してくれたわね」

何度も何度も踏みつけ、蹴り飛ばす。

その光景にシリルは愕然とした。

「ル、ルーア！？　やめてよ！　もうその人は動けないじゃない！」

予想外の事態にシリルは狼狽する。

ルーアはシリルの方を向くとにっこり微笑んだ。

「いい？　シリル。こんな社会の屑は殺しておくに限るの。だってまたあなたを狙うかもしれないじゃない」

ルーアの双眸が怪しく光る。

その瞳は嗜虐心に彩られていた。

シリルは得体のしれないものが喉元にこみ上げる感覚、激しい嫌悪感に襲われた。

「うっ……がっ」

腹部に衝撃を受けた男は苦しみながら嘔吐した。

吐瀉物の酸臭さが漂い、ルーアは眉をひそめる。

「そろそろ終わりにしましょうか」

シリルがその言葉にハッとする。

彼女が止める間もなく、ルーアは携えていた銃剣を振り下ろした。

その時だった。

一発の銃声が狂った世界を撃ち壊した。

「誰！？」

直前で動作をキャンセルしたルーアが第三者の介入に身構える。

冷たい風。ざわめく木々。揺れる木の葉。

それらに招かれるようにして常闇の中から一人の男が現れた。

彼は肩で息をしながら右手の拳銃を真っすぐルーアに向けた。

「武器を捨てて両手を頭の後ろで組め。抵抗すれば撃つ」

「アドル！」

シリルはアドルの姿を認め、自分でも驚くほど心底安堵した。

別の世界に迷い込んだような心細さが一気に溶けていき、目尻が熱くなる。

しかし同時に、ここにきていよいよ頭の中はパニック寸前だった。

普段のルーアからは考えられない残虐性、そしてそんな彼女に銃を向けるアドル。

コートの男はいまだ自由を奪われたままだ。

シリルはただただアドルとルーアを交互に見た。

「笑えない冗談だね、アドルくん」

ルーアがそのままの姿勢で言った。

シリルも同感だった。

アドルが何を考えているのか分からない。

彼は何を知っているのだろうか？

シリルは意を決して口を開いた。

「アドル、どういうことなの？」

「驚くなよ……って言っても無理か。　そこにいるルーアさんは本物のルーアさんじゃないんだ」

「えっ？」

「なぁ、ガイウス・ベッヘム」

※

「シリル！！　そいつの言うことに騙されないで！！」

ルーアは素早い動作で二挺の拳銃をアドルに向けた。

怒気を孕んだその言葉に、シリルはビクッと反応する。

アドルは自分に向けられた銃口に構わず、淡々と事実を述べることに専念した。

「ガイウス・ベッヘム。名前くらいは聞いたことがあるだろう？殺人を始め、十を超える罪科を抱える指名手配犯だ」

シリルは目に見えて混乱していた。

無理もない。

あれが普通の反応だ。

しかしアドルにはシリルが情報を咀嚼する間も惜しかった。

「ヤツは奇術士。魔術とは異なる力を行使する人間だ。ガイウスは一カ月ほど前、なんらかの方法でルーアさんに接触し、奇術を用いてお互いの体を交換した」

「出鱈目を言うな！！」

ルーアが威嚇射撃を行った。

アドルはそれに怯むことなくシリルに告げる。

「そしてルーアさんの意識を持つガイウス本来の肉体、それがそこの男だ」

アドルはコートの男を指さした。

男の目が大きく見開かれる。

「そ、そうよ！　私がルーアよ！　シリル！！」

どう聞いても男の低い声。しかしその悲痛な叫びには心の奥に響くものがある。

これまで腑に落ちなかった様子のシリルもそれを感じ取ったらしい。

「ね、ねぇアドル！　それは本当なの！？」

「本人に直接聞いてみるといい」

「う、うん」

シリルは恐る恐るといった様子で男のもとに歩み寄った。

それから男の耳元に顔を寄せて何かを言った。

男が同じようにしてシリルに答えると、シリルはその場に膝をつき、やがてひどく怯えた目でルーアを見た。

「あんたは……ルーアじゃない……の？」

「ち、違う！　私は――――――」

「そうだシリル。そいつは身体こそルーアさんのものだが、中身はまるで違う。そいつの正体はガイウスだ」

ルーアの体……ガイウス顔から余裕が消えた。

「証拠は！　私が本物じゃないって証拠はどこにあるのよ！！」

証拠なら今のシリルの反応で十分なのだが、本人が納得していないのなら仕方ない。

アドルは内心で苦笑する。

まさか探偵を辞めて最初の仕事で犯人相手に推理を披露する機会はあろうとは露ほども思っていなかったからだ。

ガイウスが行動を起こさないことを確認すると、アドルは不敵な笑みを浮かべて語り始めた。

「エディが片手間で今回の怪異に人間が関わっていないか調べてくれたんだ。その場合、まずシリルとルーアさんのことも調べる必要がある。その途中でエディは奇妙な情報を掴んだ。そうだなエディ？」

《ああ》

アドルに繋がる観測念糸を通じてエディの声が聞こえる。

≪オレが独自のネットワークを使ってルーア・ブリッツに関する情報を集めている時だった。ちょいと怪しい情報を拾ってね。中身はこうだ。一か月前、ユーフォリア中の警察や役所に自分を『ルーア』だと名乗る男が現れ始めた。だがな、その男は殺人や誘拐、窃盗を始めとする重罪を抱えた指名手配犯、ガイウス・ベッヘムだったんだよ。各機関はすぐに男の逮捕にうつったが、結局逃げられた≫

「それを聞いて、もしかしたら俺の見ていたルーアさんは本物のルーアさんではなくガイウスで、今回の事件は全てルーアさんがシリルに自分の存在を伝えるためのものだったんじゃないのか？ってな。一度疑い出すと仮説はすぐに確信へと変わった。まず一つ、今日の昼、ガイウス扮するルーアさんが言ったことだ。あの時の彼女は自分があの喫茶店の古くからの常連だと言った。だがな、俺はあそこでルーアさんを見たのは今日が初めてだったんだ。エディに頼んでマスターに確認をとってみた結果、ルーアさんが喫茶店に顔を出し始めたのはごく最近のことだという。かわりに昔から通っていた男が一人、来なくなったんだとさ。そしてもう一つ。シリルが言うにはルーアさんはひと月前くらいから少し変わり始めたらしいな。仕事を真面目に取り組むようになったりとか、ライヴは観客席で楽しむだとか、急にお酒を呑むようになったとか。その中に決定的な嘘があった。」

「なに……？」

「あんたはシリルに『魔術を習得したのはアセトアルデヒトを消す魔術を使ってお酒をたくさん呑むため』と言ったらしいな。それが決定打。いいか、魔術にアルコールを……アセトアルデヒトを分解するなんて都合のいい術は存在しない」

「っ！」

ガイウスが恐ろしい形相でアドルを睨んだ。

アドルはその視線を正面から受け止め、睨み返す。

「だが奇術にならそれがある。仕組みは少し違うが、結果的に酔わなくなる術がな」

アドルは青ざめるガイウスに向かって静かな口調で言う。

「そろそろ観念したらどうだい？」

ガイウスは拳を握りしめ、表情を歪ませた。

「フン……まぁいいだろう。どうせお前らを殺せばすむだけだ。冥土の土産に聞かせてやろう」

アドルは冥土の土産という言葉からガイウスの意図が読み取れたが、ここは素直に話を聞くことにした。

「俺はどうしてもシリルの側にいたかった。そのために奇術士の中

で禁術をされている精神交換の術を会得し、シリルの身近にいる人間と体を交換することを思いついた。そこで目を付けたのがルーア・ブリッツさ。あの女はマネージャーとして、友人として、最もシリルに近い位置にいる。おまけに他を寄せ付けない戦闘能力まで備えている。これ以上の相手はいないと思った。私はすぐに行動にうつった。身分を装い苦労して近づき、薬で女を眠らせてその後、体を入れ替えた。女は殺しても良かったが、厄介事はできるだけ避けたかった。そのために私は事前に自分自身を凶悪な犯罪者にしておいたのだ。そうすれば体を入れ替えた後、女は捕まり、処刑され、事実は闇の中という計画だった。女が俺のことを話しても狂人の言い訳だと判断されるだろうからな」

「それが真相……ルーアさん、本当ですか？」

「ええ。うんざりするぐらい本当よ。警察に追われる身となったあたしは誰かに助けを求めることもできず、逃げる日々が続いた。わずかな機会で精神交換の術を調べ、この男には奇術士としての素質があることに気付いたの。そこで私はナイトゴーントを使役してシリルをガイウスから助けることにした。でも結果は失敗。ナイトゴーントではガイウスにかなわなかった。そこで次からはせめて事実だけでも伝えればと思って、ナイトゴーントを使って手紙を渡させようとしたんだけど……ガイウスによって全てなかったことにされたってわけ」

「夜にしかナイトゴーントを寄越さなかったのは？」

「昼間は人目につくから。夜じゃないとまともに召喚もできなかったのよ」

「なるほど。エディが……仲間の情報屋が伸ばした観測念糸を切っ

たのもルーアさんですか？」

「ええ。ガイウスが仕掛けたものだと思ってたから。奇術って無駄にいろいろ出来るのよ」

「そうですか。とにかくこれで全ての糸が繋がった。残る問題は……」

アドルは銃の引き金にひとさし指をそえた。

「ガイウス、お前だけだ。お前を倒してルーアさんの体を返してもらう」

「……君にそれができるのかい？」

「やるんだよ。ルーアさんとシリルは下がっていてくれ」

「ア、アドル、大丈夫なの？」

「これ以上依頼人を危険に晒すわけにはいかない。心配しなくても何とかするさ」

アドルは二人が安全な範囲まで逃れるのを確認すると、ガイウスを睨みつけた。

「さあ、ルーアさんの体を返してもらおうか」

「嫌だと言ったら」

「実力行使だ」

「そうか。ならば君にはここで死んでもらおうか！」

ガイウスの体が蒼い魔光に包まれた。

「くっ」

アドルは咄嗟にマシンピストルの引き金を引く。

弾丸が三発撃ちだされ、しかしそれが着弾することを確認する前にアドルの体は宙を舞った。

一瞬だけ月の輝きが見え、すぐに視界が暗転する。

衝撃と共に全身に強い痛みが走った。

口の中が土の味でいっぱいになる。

「うそ……だろ」

「残念ながら嘘じゃないんだよ」

頭上からの声。

ガイウスがこちらを見下ろしていた。

「どうした？　もっと頑張ってくれないとこちらもつまらないなぁ」

「……黙ってろ」

アドルは痛みに逆らって立ち上がった。

体中の骨が軋んだが、それに構わずファイティングポーズをとる。

口の中の土を血と一緒に吐き出す。

「はあっ！」

アドルは気合いを拳にのせてガイウスに殴りかかった。

「ダメだね」

拳ははらい落とされ、反撃の余地も与えられないまま流れるようなコンビネーションをくらう。

フィニッシュのアッパーカットがくりだされ、アドルの体は再び殴り飛ばされた。

「君、立ち向かうその意気は認めるけど、他になにもないんだね」

「うる……さい」

既にアドルは立ち上がるので精一杯だった。

「ほらほら、脚が震えてるよ。実戦は初めてかい？　死を目の当たりにした気持ちを聞いてみたいねぇ」

「お、前こそ、そんな余裕でいいのか？　きっとエディが警察に通報している。もうすぐ来るんじゃないか？」

「そんなことはないさ。状況を説明したって、あの無能どもは動こうとはしないよ。仮にもし動いたとしても今ここで証言人を消せばいいことだからね」

「シリルは殺さないんだろ？」

「シリルは私を裏切らないよ」

「クソ野郎」

「それはこちらの台詞だ！」

何度目か分からない圧倒的な暴力がアドルを襲う。
ボロ雑巾のようにいたぶられ、投げ捨てられる。
頭が揺れ、吐き気が込み上げる。
脳震盪が起きたのだろう。
焦点が定まらない。
三半規管にも影響が及んだのか、ろくに立ち上がることすらできない。
アドルはあきらめてその場にうずくまる。
すぐに耳障りな嘲笑が聞こえてきた。
「相手の力量も量れず醜態を晒す。無様だなレンフィールド君！！」
アドルは黙って回復につとめる。
「私の秘密を暴いた君を私は許さない。なに、怖がらなくていい。すぐにそこの女と情報屋も送ってあげるよ」
ガイウスにとっての余興が終わったのだろう。

その手にはいつの間にか武器が顕現していた。

「アドル、逃げて！」

シリルの声が聞こえた。

確かにこれは傍から見れば逃げる状況なのかもしれない。

しかしアドルは不敵な笑みを浮かべた。

「……今日はツイてないな。事務所はボロいわ、依頼人はわがままなアイドルだわで、しかも最後は怪異じゃなくて人間が相手だ」

アドルは誰にも聞き取れない声で呟く。

閉じていた目を開けると、景色はぶれなかった。

「昨日、あいつに自分から人間に天遊は使いませんなんて言っておいて……格好悪いな、俺」

自嘲気味に言って、両腕に力をこめる。

まだ少しふらつくものの、なんとか立ち上がることができた。

「まぁ俺の事情なんて目の前の問題に比べればカスみたいなものか」
「なにをぶつぶつと呟いているんだい？　もっと自分の身の心配をした方がいいと思うがね」

ガイウスは喜色満面で武器を遊ばせている。

他者をいたぶることに快楽を見出す変質者の手本だった。

アドルはガイウスの言葉を無視すると、数歩離れた先に転がっている銃を拾い上げた。

「いいか、ガイウス。今からお前を倒させてもらう。安心しろ、不殺（さず）の意思だけは貫いてやる」

ガイウスの眉がぴくんと反応した。

「アハ、アハハハハハハ！　君は自分の置かれた状況が理解できていないのかい？」

「十二分に分かってるさ。これから反撃タイムだってことがな」

「……強がっても無駄だ。君は弱い。身体能力、魔力、どちらをとっても私に遠く及ばない」

「他人の体のくせによく言うぜ。ああ、確かに俺は弱い。だがな、俺にはまだ天遊（てんぷれ）がある」

「天遊？　聞いたことがありませんね」

「これから見せてやる。天遊――――“綴万（ていばん）”」

いつになく凛とした声が空気を裂き、突如、アドルの指先に青白い光が生まれた。

その指で銃身をすっとなぞる。

「対象の物体を剣に変換」

言うと、光が銃全体を包み込み、数瞬の後、アドルの右手には一振りの剣が握られていた。

「続けて天遊“鳴益束（おやくそく）”」

今度は赤い光がアドルを中心にして周囲に展開した。

「効果範囲半径五十メートル。対象アドル・レンフィールド、運動能力と反応速度を上昇」

煌めく紅が地面に広がり、同じく紅の燐光でアドルの全身がまぶしく輝く。

その幻想的な美しさにシリルやルーア、ガイウスまでもが息を呑んでその光景に見入った。

やがて森が暗闇を取り戻すと、アドルは剣を正眼に構え、ガイウスに戦闘開始を促した。

「待たせたな。これで対等だ」

「奇妙というより珍妙な力ですね。……まぁせいぜい足掻いてください！」

二本の小剣を携えて、ガイウスは驚くべき速度で接近してきた。

そう。驚くべき速度で、だ。

つい先ほどまでその軌跡すら捉えられなかったアドル。

しかし今の彼はガイウスの速度に対応できていた。

「はっ」

ガイウスの攻撃をかわし、流し、受け止め、弾く。

攻撃の軌道を読み、カウンターを繰り出し、正攻法で攻めたと思わせてトリッキーな動きで意表をつく。

初めは均衡だった剣戟の優劣が徐々に、アドルへと傾いていく。

アドルが同等の戦闘能力を手に入れたことで、ルーアの体に依存しきった戦いの脆さが露呈し始めた。

依然、「体」はまだまだガイウスが上回る。

しかし「技」と「心」はアドルが勝っていた。

そして数回斬り結んだ所で、ガイウスは自分から距離をあけた。

これまで有り得なかった彼の行動。

アドルはガイウスが動揺していると踏んだ。

（やっぱりか）

アドルは内心でほくそ笑む。

付け入る隙が見つかった。

確かにガイウスは強い。

動くは正確で速く、打撃の重さも相当のものだ。

しかしそれは全てルーアの肉体という恩恵があってこそ。

基本的な戦闘技術は身につけているようだが、ルーアが本来使うスタイルではないようだ。

それはガイウスの持つ武器を見ればわかる。

拳銃と打撃、斬撃の機能を兼ねる魔器。

しかし彼は近接武器としての機能しか使っていない。

通常、遠距離武器と近距離武器の能力を一つの武器に求めるのはナンセンスだ。

銃剣というものが存在するが、あれは既に時代遅れの武器であり、実戦に向いているとは言い難い。

形状的にも高速戦闘には向いていない。

だがガイウスが手にする武器、ルーアの魔器は違う。

最小限のサイズで最大限の破壊力を持つ。

銃弾は言わずもがな、例えばトンファーは近接戦闘において無類の強さを誇る。

弾き、砕き、壊す。

純粋な撲殺の能力が秘められている。

あの武器の正しい扱い方。

それは恐らく

「ガン＝カタだ」

再び数回切り結び、お互いに距離をとるため後方に下がる。

「そうですよねルーアさん。あなたの戦闘スタイルは近接格闘術ガン＝カタに魔術をミックスして昇華したものですね」

離れた位置から戦闘を見守っていたルーアが息をのんだ。

「ええ、そう。でもアイツは何も分かっていない。不幸中の幸いってやつね」

ガン＝カタ……高度な超接近銃撃格闘術。

一対多数を前提とし、全周囲からの打撃、弾丸を完全にかわしつつ同時に銃撃、または打撃での反撃で敵を倒す。

そのため用いる得物には打撃力を持つ銃が必須となる。まさにあの魔器はうってつけのものだった。

詳しい説明は省くが、ガン＝カタはとにかく強力で難易度の高い戦闘技術なのだ。

それをあの男は扱えていない。いや、そもそも存在自体知っていないのだろう。

無理もない。

アドルも実際にその技を見たことはない。

あまりに習得が困難なため、世界でも数名しか使い手がいないとされているほどだ。

とにかく、相手はポテンシャルを百パーセント引き出せていない。

つまり現状以上の力、奥の手はないということだ。

これまでの行為が意図的なものならまずいが、恐らくそれはないだろう。

アドルは意を決して武器を構えた。

「そろそろ片づけるぞ」

「ざ、戯言を。それはこちらの台詞です。私は早く君たちを片づけてシリルを安心させる義務がある」

「んな義務あってたまるか」

アドルは緊張を維持したまま、視線はそのままガイウスを見据え、声だけルーアへと向けた。

「ルーアさん、精神を入れ替える術は使えますか？」

「多分大丈夫よ。実践したことないけど。……この体になってから調べる時間はあったし、絶対に戻ってやるつもりだからね」

「安心しました。じゃあスタンバっててください。これからあの男の動きを止めます」

そのやりとりをガイウスは鼻で笑った。

「少しまともに動けるようになっただけで随分と大きな口を叩くじゃないか。それならやってみたまえ。出来るものならね！」

「ああ、お望みどおりやってやる！」

「――――――“鳴益束”、対象の全能力を低下！」

※

アドルの言葉が目に見えない力となってガイウスを襲う。

「なにっ！？」

ガイウスは全身の力が急速に抜け落ちるのを感じた。

衝撃が動揺に伝染したその刹那。

眼前の男が姿を消した。

否。

その動きを捉えられなかった。

フリーズしかけた思考はこの事実を処理できぬまま、次の対応に追われる。

「がっ！？」

圧倒的な力で吹き飛ばされ、巨木の幹に背を打ちつける。

喉元にこみあげる胃液を無意識に抑え、それが仇となって呼吸困難に繋がる。

（なんだ！なにが！どうなっている！）

ガイウスには痛みを感じる暇も許されない。

「天遊“綴万”、対象を拘束する枷となれ」

黒髪の男、アドルが今自分が寄りかかる木の肌に右手をあてていた。

赤の閃光が視界を灼（や）き、次の瞬間には全身を二の腕ほどある固いものに束縛される。

蔓……いや、木の根に違いない。

ガイウスは驚愕の中でアドルの能力を理解しつつあった。

（この男は自身の能力を底上げ、又は他者の能力に干渉して低下させることができる。そしてもう一つ、物質を変化させることができるのかっ……！）

ガイウスは先ほどまでアドルの剣を魔器の一種だと思っていた。

変化する武器といえば魔器であると考えるのが妥当だからだ。

しかしそれは間違っていた。

アドルは鉄を変化させることによって剣を生み出したのだ。

今、自分は樹木を変化させた即席のロープに捕縛されている。

指はかろうじて動かせる。

だがそれがなんだというのだ。

既に武器は取り落とし、呪文を紡ごうにも相手はその隙さえ与えないはずだ。

（なんということだ。これでは、これでは彼女を幸せにすることができない！）

ガイウスは俗に天才と呼ばれる人間だった。

奇術の扱いで彼の右に出る者はそういない。

しかしそれ故に多くの迫害を受けてきた。

元々奇術は魔術よりも外道の術と思われている。

世間の偏見が彼を孤立させ、精神的に傷つけた。

ガイウスが自らの人生に絶望した日、命を断とうとしたその日。

彼は道端の家電量販店に展示されたテレビでシリルの歌を偶然聞いた。

スポットライトを浴びて笑顔を振りまく少女の姿にガイウスは胸をうたれた。

歌が、その笑顔が渇いた心に痛いほど染み込むのを感じた。

彼女の全てが自分一人のために向けられていると錯覚した。

恩返しをしよう。彼女を幸せにしよう。

出所の分からない使命感がふつふつとこみ上げる。

一度死んだも同然の命だ。残り全てを彼女のために捧げよう。

（そう誓った。そう誓ったというのに！！）

ガイウスは目の前の男を睨む。

家族の仇を見るような目で。

アドルは悠然とこちらに剣を向けていた。

その隣によく見知った姿が並ぶ。

かつての自分。元来の肉体。

「ルーアさん、急いでください」
「分かってる。一分一秒でも早くもどりたいもの」

ルーアの両腕が白く光る。

ガイウスはその輝きを知っていた。

当り前だ。

その光こそ精神交換の術が発するものだから。

ガイウスは微笑をたたえた。

そうだ。まだだ。まだ、終わっていない。

白い光が全身を包み、意識の奔流がとても近くてとても遠い距離を移動する。

次の瞬間。

目を開けて確認するまでもなかった。

馴染みのある感覚。

自分の肉体。

奇術師としての実力を百パーセント引き出せる身体！
ガイウスは大きく後方に跳躍した。
アドルはこちらに目もくれずルーアの拘束を解いている。
「バカめ！」
ガイウスは疾走すると、怯えるシリルを掴まえて抱き寄せた。
「きゃっ」
華奢な細い体から漂う柔らかな香りがガイウスの男を刺激する。
そうだ。最初からこうすればよかった。
彼女を傷つけないようにすることが彼女を傷つけていた。
笑ってしまう。なんて杞憂だったんだ。
（僕とシリルは運命で繋がれている。もしかしたらシリルの想いを拒んでいたのは僕の方だったのかもしれない）
ガイウスが他人との関わりを持たない狭い世界で生きてきた結果

がこれだった。

人の好意に馴れていない人間が勘違いした、ただそれだけ。

しかしガイウス本来の性格と、そんな彼が制御するには大きすぎる力が彼の道を外させた。

「いやっ、放して！　ルーア！　アドル！」

シリルはガイウスの腕の中で必死にもがく。

「何をそんなに怖がっているんだい？　ああ、彼らなら今から私が殺してあげるよ。そうすれば僕たちの邪魔をする奴はいなくなる」

「っ……」

ガイウスは優しい声色でシリルに言った。

途端、彼女の白い肌が青ざめ、全身を振るわせ始める。

「可哀想に。すぐに終わらせてあげるよ」

俯いたままのシリルは何も答えなかった。

そんな彼女の代わりに応える男がいた。

「それはこっちの台詞だ。このサイコ野郎！」

※

「心外です。僕のどこが精神疾患者ですか」

ガイウスは本当に不愉快そうに顔をしかめた。

アドルは嘆息する。

「手遅れだな」

その後に本来の体を取り戻したルーアが

「鏡で己の姿を客観視してみるといいわよ」

と付け加えた。

「そうですか。帰ったら見てみますよ。でもその前にやるべきことがある。倒すべき敵がいる」

「奇遇だな、俺もだ。ぶん殴りたいヤツがいる」

「偶然ね、私もよ。蹴り飛ばしたいヤツがいる」

「ならば……存分に殺(や)りあおう！

ガイウスが指をならした。

空に現れる無数の円陣。召喚陣だ。

その全てから同一の化け物が顕現する。

黒い翼人、ナイトゴーント。

アドルは敵ながらガイウスの能力の高さに尊敬の念を抱く。

中級クラスとされるナイトゴーントをこれほど同時に召喚するなど並みの術師ができる芸当ではない。

才能に頼らず、努力を惜しまなかった結果なのだろう。

総勢五十近いナイトゴーントがアドルとルーアの周囲を取り囲んだ。

「ねぇ、アドルくん……だっけ」

「なんですかルーアさん」

「ものすっごく惜しいけど、王子様役は君に任せよう。ウチの姫を頼んだよ」

「……分かりました。それじゃあルーアさんはこいつらの相手を頼みますね」

「君、もう少し女の子を大事にした方がいいよ……」

ルーアさんってもう女の子なんて年齢じゃ……という野暮な発言、もとい失言をアドルは直前で呑みこんだ。

「ルーアさんを心配するより自分の心配をした方がよさそうなんで」

「そっか。なら後ろは気にしないでいいから」

「諒解です」

アドルとルーアは軽く目配せして、敵の攻撃の第一波に備える。

「私が穴をつくるからその隙に行って」

十を超えるナイトゴーントが一斉に襲いかかってきた。

ルーアはアドルを庇うように前にでると、両手の銃を胸の前で交差させる。

「さあ、戦闘開始(オープンコンバット)よ！」

ルーアがトリガーを引いた。

それが合図となって一対多数の交戦が始まる。

アドルは呆然とその光景に見入った。

まさか……これほどまでとは。

相手に肉薄した超至近距離での超高速銃撃。

こちらの気が狂いそうなほどのトリガー・ハッピーぶり。

終(つい)えることのないマズル・フラッシュが辺りを煌々と照らす。

薬莢がフライパン上のポップコーンのように跳ねまわる。

驚くべきはリロードの速さ。

カートリッジ式のそれを目にも止まらぬ速さで済ませている。

出鱈目な魔法を見ているようだ。

しかし彼女の強さはそれだけにとどまらない。

近接能力を兼ね備えた魔器が、銃弾を受けてひるんだ敵を躊躇いなく潰していく。

まるでそれはダンス。

美しく、流麗で、恐ろしい。

仕上げとばかりに魔術が発動。

巨大な氷塊が空中に出現、落下し、全てが粉々になった。

「今よ！」

一拍遅れて、我にかえったアドルは駆け出す。

包囲網を抜けるとそこにはガイウスとその左腕に抱かれたシリルがいた。

「シリルを返してもらうぞ」
「アドル……ルーアは？」
「心配ない。あの人、化け物みたいに強いから」
「そう、良かった」

シリルの目は赤くなっていた。

アドルとルーアの姿がナイトゴーントに覆われ見えなくなったことで、一気に不安を掻き立てられたのだろう。

「まだ良くない。お前を助け出して、それで任務完了だ」

「アドル……」

「……忌々しい。ああ、忌々しい。　なぜ君たちはそうまでして僕の邪魔をする！」

「ひとつ、シリルは俺の依頼主（クライアント）だ。助ける義務がある。ふたつ、お前は根っからの犯罪者だ。このまま逃がすわけにはいかない。そしてみっつ、ここで逃げたら後味悪いだろうが！」

「ああ、なんてことだ。君はバカだったのか！」

「そうだよ。俺はシリルという人間と知り合ってしまったんだ。そ

の時点でもう俺とそいつは他人じゃない。少なくとも、ここでシリルを助け出せなかったら俺はずっと後悔する。明日のメシがまずくなる」

「損得を度外視すると？」

「俺の趣味は慈善事業なんだ」

「綺麗ごとを」

「綺麗ごとすら言えなくなったら終わりだぜ？」

「……フッ、クックック、アハハハハハハハハハ！」

「ついに壊れたか？」

「違いますよ。君のバカに付き合ってあげようと思ったんです。君は私からシリルを奪う。私は君を殺してシリルを守る」

「最初からそのつもりだ」

「だがね！　君の負けは確定している。何故なら君は私に対して下手に出るしかないからだ」

「……確かに俺は途方もないアドバンテージをお前に握られている。お前のような腕利きからシリルを危険に晒すことなく取り戻すのは至難の業だ」

「そうでしょう、そうでしょう」

「聞こえなかったのか？　至難の業だって言ったんだよ。誰も出来ないなんて言ってない」

「……なら、見せてください！　君の力を！！　それが出来ないなら君は死ぬだけだ」

ガイウスは嘲り笑いながら、右の掌に生み出した憤怒の炎を撃ち放った。

燃え盛る紅蓮。触れれば骨も残さず蒸発させるほどの熱。

しかしアドルは微動だにしなかった。

ただ、小さく呟いた。

「天遊……“王道（おうどう）”」

※

「アドル！！」

シリルは無意識のうちに甲高い声をあげた。

眼前で燃え盛る火柱。圧倒的な破壊の力。

ガイウスの放った火球が着弾する最後の瞬間までアドルは動く素振りすら見せなかった。

いくらアドルでもあそこから避けるのは不可能だ。

つまりそれが意味することは……。

「うそ……でしょ」

シリルの瞳から大粒の涙が幾滴もこぼれて、服の袖に染みをつくった。

目の前が真っ暗になり、世界が絶望一色になる。

両腕が力なく垂れ下がる。

胸にずしりとのしかかるのは罪悪感。

もしアドルに依頼しなければ、彼は今日ここで死ななかっただろう。

つまり、自分がアドルを死に追いやったも同然なのだ。

無数のＩＦを頭の中で思い描く。

どうしてこうなってしまったのか。

呆然と虚空を眺めるシリルは、最早、自分が恐ろしい者の腕の中にいることすら忘れていた。

そのため次に起こったことも認識できなかった。

「え？」

一瞬で見ている景色が変わった。

今までは地面を焦がす炎の残照が視界におさまっていた。

しかし今はどうだ。

シリルはたった数秒前まで自分の体を掴んでいたガイウスの姿を十数メートル離れた場所から見ていた。

「な、……何をした？　何をしたんだ！！」

ガイウスは怒りの形相でシリルにむかって叫んだ。

否。

正確にはシリルを抱く男に対して叫んだ。

シリルは背に体温を感じて振り返る。

「っ」

そこには、まったく無傷のアドルがいた。

彼がシリルの体をしっかり抱き上げていた。

俗に言う「お姫様だっこ」というやつだ。

「ど、どど、どうして！？」

シリルはきょとんとした眼でアドルの顔を見る。

「今のか？　時間の流れを操って一ミリ秒（１０００分の１秒）で行動した。単純な高速移動とは違って体が負荷でバラバラになったりしないのがメリットだな

「ち、ちち違う。私が聞いているのはそんなことじゃない。その力はなんだ！？」

「お前に言ってないっての」

これまでとは明らかに違うアドルの飄々とした態度に、ガイウスは身を震わせて絶句する。

「そろそろ終わりにしようか」

アドルはシリルを降ろすと、剣の切っ先をガイウスに向けた。

「欲望と共に散華しろ」

※

諦観がガイウスの頭をよぎる。

（殺される殺される殺される……！）

前例のない超絶的な恐怖が全身を硬化させる。

悠然とこちらを見ているあの男はなんだ？

優秀な術者であるガイウスは見抜いていた。

あれは時間を操る術なんて生易しいものではないことを。

先ほど見せた芸当はほんの断片に過ぎないということを。

人間が扱うにはあまりに強大すぎる力。

（あいつは何者なんだ！！）

悪鬼？魔王？堕天使？死神？

どれもが正解でどれもが間違っているような気がした。

とにかく人智を超えた存在であることに間違いはない。

ガイウスの弱さが刺激される。

（ここで負けを認めれば、ここで命乞いをすれば、あるいは朝日を拝めるかもしれない）

そんな考えが浮かび、だがそれもすぐに消えた。

生き延びてどうする。

シリルを失い、自分は間違いなく犯罪者として捕えられる。

どのみち死刑を待つだけだ。

「ならば……最期に君という存在がなんなのか確かめて終わらせよう！！」

「どうした？　覚悟はできたのか？」

「ああ。私の最大の力で君に挑むことにするよ。もし君が防げなければ君はおろか、シリルもそこの女も全員死ぬ」

「面白い」

やはり、とガイウスは思った。

先の火球をかわしてからあの男の雰囲気が違う。まるで別人のようだ。

それまでの彼ならこうも好戦的な受け応えはしなかっただろう。

「私の最大の術、受けてみよ」

全身の力を一点に集中。集中。集中。

両手を頭上に掲げ、溜めていた力を一気に解放。

体中が暴れ狂う力の大きさに悲鳴をあげるが、かまわず術の構成にうつる。

綿密で繊細な術式を組み上げる。

エネルギーの塊がガイウスの頭上に形成されていき――――そしてついに術が完成した。

ガイウスは大きく深呼吸をすると、敵対する男だけを見据え、吼えた。

「消し飛べ！！」

声に重なって凄まじい轟音が周囲の大気を震わせる。

エネルギー体は光の帯となってアドルを襲う。

触れなくとも、側を通過しただけで半身が消し炭になるほどの力。

その脅威を前にして、アドルはおそろしいほど冷静に呟いた。

「“王道”、空間を断裂」

アドルの胸の前、なにもない空間、そこに亀裂が生じ、未知の空間が姿を現す。

ガイウスの撃ち放ったエネルギーは全てそこに吸い込まれ、やがてそれが終わると何事もなかったように静かに消えていった。

渾身の一撃はあっさりと虚無に呑みこまれた。

それはすなわち決着。

アドルの勝利だった。

（……化け物め）

全精力を使い果たしたガイウスは、そのまま糸の切れた人形のように気を失って倒れたのだった。

※

それからすぐにルーアもナイトゴーントの殲滅を完了し、これまでの逃亡生活で過労が絶頂にあったためか、ガイウスの拘束を終えるとすぐに木の幹にもたれて眠りに落ちてしまった。

アドルとシリルは適当なところに腰を降ろし、木と木のわずかな隙間から見える星を眺めていた。

「なぁシリル」

隣に座るアドルが不意に口を開いた。

シリルは自分でも分からないが、なぜか狼狽してしまう。

「な、なに？」

「これで任務完了かな？」

任務完了。

その言葉はシリルにとって嬉しいはずなのに、どことなく寂しい響きがした。

「うん……そうね。ルーアも助かったことだし、あたしを危険に晒したことは目を瞑っておいてあげる」

「悪いな。あともう一つ」

「？」

「天遊ってただでさえ反動デカイのに、今日は久しぶりだったからさ」

「それで？」

「あとは任せた。じゃ、おやすみ」

言うや否や、アドルは前のめりに倒れこむ。

「ちょ、ちょっと！」

あわててシリルがその体を支える。

想像以上にアドルの体は重く、がっしりしていた。

本当に限界だったようで、早くも寝息をたてている。

「こんなヤツでも一応男なのね」

穏やかな彼の寝顔を見ているとなぜだか頬が熱くなってきた。

（なんで？　どうして？）

そんな疑問が表面化する前に、明るい光がこちらに向けられた。

「大丈夫かアドル！　シリルたんも！」

見ると、エディを先頭に何人かの人間がライトを片手に立っていた。

シリルは元気よくそれに返事をする。

そして今一度アドルを見て、

「お疲れ様、アドル」

腕の中で眠る彼にそっとそう囁いた。

ｔｅｍｐｌａｔｅ：３　夜を駆ける（後書き）

今日はもう遅いので次回予告は明日になります。
次の話は文量を減らす予定です。
がんばります。
ちなみに第三話サブタイトルの没案は「ミッドナイトラン」でした。
まぁほとんど同じ意味ですけどね。

第四話予告とか（前書き）

第三話を読んでくださった方々、お疲れさまでした。

第四話予告とか

相変わらずな次回予告

ルーア：ふっかーつ！！

シリル：ちょっと、いきなり耳元で叫ばないでよ

ルーア：一か月以上もあんなことになってた私の気持ちが分かる！？

シリル：分かりたくない。それを言うならあたしだって

ルーア：貞操はともかく唇くらいは奪われてるかもね

シリル：……

ルーア：シリル？

シリル：う……

ルーア：う？

シリル：うわあああぁぁぁん！！

ルーア：ええ！？　マジ泣き！？

シリル：っ、ひっく、ぐす……

ルーア：ちょ、ちょっとどうしたのよ！

シリル：考えないようにしてたのに、ひどい

ルーア：あー…ごめん。なんか読者の皆様からツッコミが来そうだったから先手を取って訊いてみたのよ

シリル：もし……そうだったらもうお嫁に行けない……

ルーア：シリルってばそんな古風な考えだったかしら

シリル：あたしだって乙女なの！純情可憐で繊細な女の子なの！ルーアとは違うんだから

ルーア：なんっ……ですってぇ？

シリル：あ、いや、あはは

ルーア：ほらぁ、お嫁の貰い手ならいるじゃない。アドルくんとか

シリル：え？　ええー！？

ルーア：ルックスはそう悪くないし、けっこう強いし、何より優しそうじゃない

シリル：で、でもアイツ、きっと甲斐性ないわよ。全然お金持ってなさそう

ルーア：そんな俗物な意見を言う人間が自らを乙女なんて名乗る資格はない！

シリル：まださっきの引っ張ってたんだ

ルーア：私だってまだ二十代よ

シリル：もうすぐ三十路ね

ルーア：まだよ、まだ

シリル：まぁそれはひとまず置いておくとして

ルーア：今回の反省？

シリル：うん。作者が言うにはこの第三話でもう挫けかけたらしいわ。まったくすぐ諦めるんだから

ルーア：驚きの脆さってヤツ？

シリル：ガラスのハートなんだって

ルーア：ろくにプロット組んでなかったからヒドイ目にあって当たり前よ

シリル：前後編なのに前編書いた時点じゃ後編の構想は「ラストはハッピー」くらいしか考えてなかったらしいし

ルーア：行き当たりばったりにもほどがあるでしょ。O型もここまで来ると最早別ものね

シリル：で、早速困ってどうにかしようと頑張ってみたものの良案は浮かばず。二話から書き直すか早くもギブアップかの選択を迫ら

れた

ルーア：だったんだけど、どうせ趣味で書いてるだけだからそこまで肩肘張らなくてもいいか、って考えて今の状態になったのよねぇ

シリル：展開としてはつぎはぎだらけで見れたものじゃないけど

ルーア：まぁ序盤だからそこは大目に見ましょう

シリル：でもそのおかげで登場予定だったノーデンスさんやニャル様といったクトゥルフの神様たちを汚さなくてすんだから結果オーライ？

ルーア：ナイトゴーントは犠牲になったのだ

シリル：ご愁傷様

ルーア：ついでにもう一つ。今回のＮＧシーンをちょこっと公開！

シリル：あたし聞いてない！

ボツネタ

～謎の男から逃げるシリルがアドルと合流した時のワンシーン～

「遅い！　もう、バカアドル！！」

「なっ」

「依頼人を危ない目に遭わせたんだから覚悟はしてるんでしょうね」

シリルはつかつかとアドルに近づくと右手を大きく振りかぶる。
アドルは　ただ黙って目を閉じた。
その潔さにシリルは釈然としないものを感じながらも右手を振りぬこうと力を入れ、
「あっ」
唐突に膝ががくんと力を失った。
シリルは勢いを殺せず、そのままアドルに向けて倒れていく。
そしてそれは図らずもアドルの胸に飛び込む結果となった。
気まずい沈黙。
見上げると、困惑した表情のアドルと目が合った。
「ち、ちょっと安心して力が抜けたの！」
これは事実だ。言い訳では断じてない。
シリルは心中でそう言い聞かせながらも、顔が熱くなっていくのを止められない。

「そ、そうか」

応えるアドルの声はかすかに震えていた。

「しっかり支えなさいよ」

「はい……分かりました」

ルーア：……

シリル：なんっなのよコレは！

ルーア：作者がベタなシーンを入れようとしたけど、「アドルとシリルって今日会ったばっかりだし、吊り橋効果にしたって無理あるかな」と判断してカットした部分

シリル：そうじゃなくて、上のキャラ誰よ！？

ルーア：作者が言うには「シリルっていまいちキャラが確立していないんだよねぇ。なんか名前も合ってない感じがするし。一回こっきりの使い捨てにしようかなぁ」だとさ

シリル：あたしってメインヒロインじゃなかったの？

ルーア：この物語にヒロインなんていないわよ

閑話休題

シリル：そういえばようやく天遊（てんぷれ）が出てきたわね

ルーア：だけどちょっと説明不足かも

シリル：じゃあここで簡単に説明する？

ルーア：え？いいの？本編じゃないよここ

シリル：そっか。そうだよね。無理か

ルーア：取り敢えず「ぼくのかんがえた～」的ノリのチートだということは読者様も分かったんじゃない？

シリル：厨二まっしぐらね

ルーア：そのうちインフレが起こるのよ、きっと

シリル：せめて「実は～だった」展開にならないことを祈るわ

閑休

シリル：それじゃあ次回予告

ルーア：眠いからとっとと終わらせよー

シリル：あたしとルーアはアドルとエディを呼んで感謝をこめた慰労会を開きました。でも、そこに予想もしない人物が現れます。それは魔女

ルーア：と思ってるだけだから

シリル：あれは魔女よ。いくらあの人がゴニョゴニョでも魔女ったら魔女！

ルーア：まぁそこに更に二人増え、総勢七名で私たちはあるゲームを始める

シリル：ある意味人生を賭けたゲームね

ルーア：というわけで次回はギャグ回なのかな？

シリル：予定だとね。予定は未定だからなんとも言えないけど

ルーア：ふーん。ま、いいわ。それでは皆様、次回をお楽しみに。じゃあね～

第四話予告とか（後書き）

明日は家を出るのが遅いのでもしかしたらそれまでに第四話を上げられるかもしれません。遅くとも三日以内にはＵＰします。
落ち着いてきたらしっかり週一で投稿したいですね。
ちなみに天遊は全て適当に決めた当て字です。
正しくは綴万＝「定番」鳴益束＝「お約束」です。
どういった傾向で名前をつけているのかはもう分かりましたね？

ｔｅｎｐｌａｔｅ：４　人生生き残りゲーム（前書き）

すみません。
レポートやらバイトやら変なイベントやらで予定より遅れました。
急造なのでいつもに増してクオリティが低いかも。

ｔｅｎｐｌａｔｅ：４　人生生き残りゲーム

ｔｅｍｐｌａｔｅ：４　人生生き残りゲーム

ガイウス・ベッヘムによる事件から三日。

黒髪の青年、アドル・レンフィールドは依頼達成のご褒美として与えられた休暇を満喫していた。

……これには少しばかり語弊があるかもしれない。

正確には例のボロ事務所の掃除・修繕に十全の力で挑んでいた。

休暇とはいってもデートに誘うような女性もいない、平日の真昼間から付き合ってくれる友達もいない、そもそも金がない。

加えて言うとろくに住める家もない。

現在のアドルの住処はセレスフィアから与えられたこの事務所だ。

どうにかして片づけないことには依頼客への対応はおろか、最低限の生活環境すら危うい。

この数日間を全て警察の事情聴取や、管理局本部への報告書を書き続けて過ごした。

特に後者がひどかった。

しかしそれも無理はない。

（まさか……こんな大事になるなんてな）

汚部屋の中心に置かれた、埃をかぶったアンティークの丸テーブル。

アドルはその上に置かれていた号外を手に取る。

何度目になるか分からない。

紙面の文字に目を走らせる。

見出しにはでかでかと「トップアイドル！まさかの大事件～悪夢の生活の実態～」と書かれていた。

こういうネタはスポーツ新聞やゴシップ雑誌だけにしてほしい、心底そう思った。

そう。

今や世間はアドルが解決した事件の話題で持ちきりなのだ。

当初は管理局が各機関に手をまわし、報道規制や情報操作を行う手筈だったのだが、そこは壁に耳あり障子に目あり。

アイドルというのは常に恰好の情報源として嗅ぎまわられているらしい。

しかもそれがトップアイドルなら尚更だ。

かくして呆気なく情報は漏洩し、今に至る。

拡大した騒ぎのせいでアドルは上からお叱りを受け、来る日も来る日も平謝り。

あっという間に時の人となったシリルは連日テレビに出演している。

彼女の精神的ショックはかなり大きかったものと容易に推測できた。

それでも彼女は何事もなかったかのように画面の向こうで明るく振る舞う。

アドルはその姿を素直に感心していた。

ちなみにそれは全て管理局内で観たものだ。

事務所にテレビは置かれていない。

「すごいよな。やっぱり本物のスターなんだな」

アドルは誰に言うでもなく一人呟いた。

遠い存在になってしまったシリル。

というか元々遠い存在なのだが、印象の強い騒動だったため、不思議と親近感が湧いていた。

彼女と最後に会ったのは病室の中。

疲労で倒れたアドルのもとにルーアと一緒に見舞いにやってきた。

簡単なお礼を言ってから、仕事があるからと早足に部屋を出ていき、それきりだ。

「この仕事って一期一会なんだなぁ。……探偵の時もそうだったけど」

モップを支えに感傷に浸っていたその時だった。

呼び鈴が鳴らされた。

アドルは客か？と思う前に呼び鈴が機能していることにまず驚いた。

そしてふと疑問に思った。

ここはただの家ではない。

管理局の支部だ。

わざわざ断りを入れて入ってくる必要はない。
扉のむこうにいる人物はよほど律儀な性格なのだろうか？
早足で向かい、自動ドアとは程遠い木製のドアの前に立つ。
老朽化したドアノブに手を伸ばすと、ぽろりと外れた。
「……はあ」
お客様は一枚板の向こうで唖然呆然としているに違いない。
アドルは笑顔をつくってからドアを開いた。
「よう」
外に男が立っていた。
アドルは黙りこんだままドアを締め直す。
「おいアドル！」
気落ちした心を慰めるようにドアを勢いよく押した。

引くのではなく押した。

「ぶべっ」

奇怪な声。

視線をすっと下の方へ向ける。

地面につぶれたカエルのような物体が転がっていた。

よく見ると人間だ。

あまりに歪な形なのでアドルは気付かなかった。

「『アドルは気づかなかった』じゃねぇよ！！」

人間はすぐさま起き上がるとアドルに詰め寄った。

「おはようエディ。お前はエスパーだったのか」

「やけに機嫌が悪いな。八つ当たりカッコ悪い」

「違う。これはちょっとしたスキンシップだ」

「イジメる奴はみんなそう言うんだよ」

「すまん。許してくれ。……ん？ああそうか、ありがとう、許してくれて」

「耳鼻科行け」

「まぁ中に入れよ。茶くらいは淹れてやる」

「おう」

緑色の毒っぽい短髪にオレンジのサングラス。

耳がちぎれそうなほど多くのピアスをぶら下げる男。

エディ・カーソン。二十四歳。

この世界の情報全てはオレのためにある！　と豪語するだけあって、情報屋としての腕は折り紙つき。

ただしそれ以外の人間としての部分が欠落している。

壊滅的といってもいい。

ちなみに最近「アイドルオタク」の項目が追加された。

そんな彼がアドルのもとを訪ねてくることは本当に稀で、明日は台風かもな、とアドルは思った。

「きったねぇなー」

エディは時折せき込みながら事務所の中を歩き回っていた。

「ここって鴬張りなのか。へー」

鴬張り。

東洋の国に伝わる建築技術の一つだ。

外敵の侵入を報せるため、床の板を歩くと軋んで音が出る構造になっている。

暗殺を警戒した高度な技術だ。

無論、この建物にそんな機能はない。

アドルはエディの皮肉を無視し、安物の紅茶を淹れてエディに渡した。

「ソーサーもなければミルクも砂糖もなしか。それがお客様に対する礼儀かい？」

「冷やかしなら帰ってくれ」

「不味いなぁ。もっといい茶葉買えよ。紹介してやろうか？……おっと、すまない買えないんだったな」

「……実はそのカップの中に雑巾しぼっておいた」

ゼロコンマの速さでエディは口の中の紅茶を盛大に噴出した。

「アドル！　てめぇ！」

「冗談だ」

「冗談に聞こえないんだよ！」

「お前が勿体ぶってるからちょっとした嫌がらせをしたまでだ。早く用件を言え」

「仕方ないなぁ。それよりティッシュくれ」

「ほい」

「サンキュ……ってこれ雑巾じゃねぇか！？」

※

晴天の下。

アドルとエディは事務所前にあるボロい石垣に背を預けていた。

埃に絶えきれなくなったエディが外で話すと言ったのだ。

早速エディは話を切り出した。

「実はな、いいネタがあるんだ」

「お前から俺に提供してくるなんて……初めてじゃないのか？それより俺からもお前にプレゼントがある」

「お。なんだ？」

アドルはエディに棒をさしだした。

「はたきだ。これさえあれば埃もなんのその。なんとこれは俺の事

務所を掃除できる優れものだ。今ならもれなく雑巾もついてくるぞ」
「うわー、すごいなあ。うれしいなあ」
「そうだろう、そうだろう」
「って、んなワケあるか！」
「うわ、下手なノリツッコミほど痛いものはないな」
「話の腰を折るなんじゃねぇよ。ともかく黙ってオレの話を聞け」
「分かったよ」
「いいか？泣けよ？喚けよ？喜べよ？」
（どうすりゃいいんだよ……）
「シリルたんからお誘いが来たぞ！」
「ナ、ナンダッテー」
「ノリ悪いぞお前」
「どうしてお前のくだらないジョークにリアクションしなきゃならないんだ」
するとエディは意味深な笑みを浮かべた。

「あーあ、それじゃあアドルくんは欠席でいいんだね？　まっ、どうせオレのオマケみたいなもんだから来ても来なくても変わらないか。むしろそっちの方が都合いいし」

そう言いつつもアドルの方をちらちらと窺っている。

アドルは溜息をつくと、

「悪いが俺は忙しい。寂しいなら他をあたってくれ」

エディを一瞥して事務所に入った。

「ちょっ、待てよアドル！」

エディがすぐさま追いかけてくる。

ドアの鍵をかけようと手を伸ばし、アドルはハッとした。

「ヤバッ」

ドアにドアノブが存在していなかった。

こうなると鍵もかけられない。

アドルはほぼ反射的に、

「“綴万”　ここを固定だ！」

天遊をつかってドアを完全に壁と接着してしまった。

『アドル！　おい、アドル！　お前、そこまでするかフツー！？』

エディは暫くドアでなくなったドアの前で粘っていたが、アドルから返事がないことを確認すると帰っていった。

「何やってるんだ俺は……」

なぜこんなことをしてしまったのか。

後悔の念に苛まれる。

今更掃除を再開する気にもなれず、アドルは椅子に座ると、一人うなだれるのだった。

※

その夜。

アドルがようやく寝室を掃除し終わり、ベッドに身をゆだねているうちにまどろんでいた。

そして意識が隔絶される寸前のところで現実に引き戻される。

部屋の窓が壊れるくらい強く叩かれていた。

（エディか？　そうだったら一応謝らなくちゃ……）

そう思ってアドルが窓際によると、意外な人物が外に立っていた。

「シ、シリル……さん？」

『どうしてさん付けなのよ』

「ど、どうしましたかこんな夜分遅くに」

『仕事が長引いたのよ。それより早く中に入れて。風引いちゃうじゃない』

「い、いますぐ窓を開けるよ」

アドルは窓を開ける。

しかしシリルは不機嫌そうに頬を膨らませた。

「で、窓を開けたからどうしろってワケ？　まさか女の子に窓から入れって言うんじゃないでしょうね？」

彼女の言い分は尤もだった。

エディなら問題ないが、彼女は女の子。

窓枠を跨いで室内に入るなど、はしたないにもほどがある。

アドルは泣く泣く“綴万”で壁を変形させた。

「あら、意外と片付いてるわね」

「き、恐縮です」

「ねぇ……その変な態度やめてくれない？」
「いや、え、だって、なあ」
「？」
「目の前にトップアイドルがいるんですヨ？　そしてここは俺の家」
「だから？」
「緊張しないはずないだろ！？」
「な、なによ突然。初めて会った時から平然としていたじゃない」
「あれは仕事だったから……」
「なによそれ」
「仕事は盲目ってことです」
「とにかく普通に接してよ。調子狂っちゃう」
「無理です」
「あーもう、じゃあそのままでいいわ。どうしてあたしの誘いを断ったの？」
澄んだ瞳に見上げられ、アドルは視線を逸らして頬をかいた。

「あ、あー……あれって本当のことだったのか」

「まさか……信じてなかったの？」

アドルが誘いを疑ったのはエディが信じられなかったためだったのだが、シリルはそう受け取らなかったようだ。

「あんたにはそう見えないかもしれないけど、あたしはこれでも礼を尽くすタイプなの。せっかく仕事も空けていいお店も予約しておいたのに……」

アドルはかけるべき言葉が見つからず、情けなくも黙ってしまう。

シリルはアドルに詰め寄った。

至近距離で二人の視線が交差する。

「ねぇ、お願いだから来てよ。アドルが来てくれないとあたし……」

「それはどういう……」

アドルは次に続く言葉を持たなかった。

頭が真っ白になるほどシリルに目を奪われていた。
天頂の座に位置する夜の神が二人の影を際立たせる。
アドルは無意識に喉を鳴らした。

「シリル、お前……」

アドルがシリルに手を伸ばそうとして、

「あの変態の相手をしなくちゃいけないじゃない！！」

垂れ下がった。

「ですよねー」

「で、来るの？　来ないの？」

ちょっぴりの落胆を隠滅するため、アドルは素直に応じる他なかった。

「分かった分かった。行くよ。ただし条件がある」

「なに？」
「慰労会の会場はお前の家だ」
「ど、どうして！？」
「お前はアイドルだ。人目のつく場所じゃ落ち着かないんだよ」
「あたしは平気だけど」
「こっちが心配なの」
「スタッフってことにしておけば……」
「いいかシリル。職種ってのは目に見えない雰囲気として現れるんだ。お前からカリスマというか、人を惹きつけるオーラを感じ取るのと同じでな。少なくとも俺やエディみたいな奴はまっとうな職に就いているようには見えないと思うぞ」
「……でもあたしの家でやるとして、料理は？　どこに頼む？」
「お前なぁ。頼むとかそういう以前に手作りという選択肢があるだろ」
「ム、ムリよ！　あたしもルーアもお互い仕事で忙しいから料理なんて全然やったことない」
「うーん、でもなぁ、食べたいなぁ。アイドルの手料理」
「うぅ……」

「お前のミソスープが飲みたいんだ」

「アドル」

「作ってくれるか」

「……ミソスープってなに？」

※

約束の日。

アドルとエディは顎が外れるほど口を開いて、その建物を見上げていた。

あかね色の空に映える豪奢な宿泊施設。

エクスファルナ屈指の最高級ホテル「リッツ・ユーフォリア」が二人の前に建っていた。

なぜこうなったのか？

発端は昨日の手紙だ。

郵便受けをチェックすると差出人がシリルのものがあった。

そこに記されていたのは彼女の新しい住所。

ここに来てほしいと書かれていた。

その住所こそがこのリッツ・ユーフォリアなのだ。

「なあアドル」

エディが上を見たまま言った。

「オレたちどうやってここに入るんだ？」

「さあな」

「ってか、本当にここでいいのか？」

「さあな」

「ちょっとは真面目に返事しろよ！」

「在庫処分セールで買った俺の靴で、あの綺麗な大理石を踏んで大丈夫なのかなーと」

「大理石くらいいいだろ」

「でもきっとその先には豪華な絨毯が広がっている気がする」

「ああ、なるほど。確かにオレたちは場違いすぎるかもな」

野郎二人が立ち往生していると、ふとロビーにシリルの姿が見えた。

彼女も二人に気付いたらしく、早足でホテルを出てくる。

「ごめんね。二人がどうやって入るかまで気が回らなかったの」

「普通気づくだろ」

「うるさいわね。とにかくついてきて」

アドルとエディはシリルの先導に従ってなぜかホテルとは逆の方向へ歩き始めた。

※

数十分後。

アドルとエディはジャケットを着用していた。

シリルに連れられていった服飾店で購入してものだ。

格式の高いこのホテルは中途半端な身なりではろくに動けない。

二人とも慣れない正装であるため表情に余裕がなかった。

緊張しているためしきりにネクタイを締め直す。

その様子を見てシリルは小さく笑った。

「もっと手足の力を抜きなさいよ」

同じく正装のセレスフィアに続いて、二人は部屋の中に足を踏み入れる。

入るや否や、アドルは絶句した。

「……す」

「すげぇ！！おいアドル！　マジでリッツ・ユーフォリア最上階のスイートだぜ！！　夢みたいだ！！」

エディが落ち着きなく部屋を見てまわる。

言いたいことは全てエディが言ったので、アドルはじっくり部屋を観察した。

住む世界が違う。

ロビーから部屋に来るまでにも思ったが、全体的に天井が高く、どこを見ても目がちかちかする。

気品ある内装と調度を兼ね備えた超一級の洋室。

数々の調度品が部屋を飾っているが、ごてごてした印象は微塵も感じさせない。

アドルは足元がふわふわするような錯覚を覚えた。

広さとしてはちょうどいいくらい。

そこがまた客人を配慮した造りだと思えた。

白い壁にはわずかな汚れすら見つからず、徹底した清潔感がある。

何より最上階だけあって景色が良かった。

この美しいユーフォリアの景観が存分に見渡せる。

ホテルの高さはそれほどではないものの、近代的なビルの少ないこの国では、そもそも高い建造物の絶対数が少ないのだ。

これ以上の高さになると街のシンボルでもある大時計塔を含め、数えるほどしかないだろう。

驚くべきことは他にもある。

眼下の大通りは人で埋め尽くされている。

この時間帯は非常に混雑しているのだ。

にも関わらず、このホテルに一歩足を踏み入れてからはそれらの喧騒がまったく聞こえなくなった。

「どう？　素敵な眺めでしょ」

いつの間にかアドルの隣にシリルが立っていた。

「そういえばどうして引っ越したんだ？」

「あの男と同棲していたような場所なのよ。愛着はあったけど……」

「なるほどね。でもここはいくらトップアイドルでも住むにはきついんじゃないのか？」

「馬鹿ね。新しい物件が見つかるまでの仮住まいよ。ルーアも一緒に住んでるしね」

「それにしたってなぁ」

「知り合いのツテで格安にしてもらってるの」

「知り合い？」

シリルはその人物の名を口にしたが、アドルには心当たりがなかった。

なんでもその男はこのホテルブランドの家系で、シリルに好意を抱いているらしくここを利用するのは大歓迎らしい。

「知らないの？　有名な俳優よ」
「う～ん、あんまりそういったことは詳しくないんだよな」
「そいつ、シリルたんとドラマで共演したあのキザ男か」
横からエディが顔を出した。
「知ってるのか」
「有名だぜ。もしシリルたんとのキスシーンがあったなら今頃この世にいないけどな」
「お前は本気で言ってそうだから怖い」
「で、シリルたんはそいつのことどう思ってる？」
「どうって……彼はいい人だけど、そういう感情はないわ」
「いちファンとして安心した～」
「それよりルーアさんは？」
「もうそろそろ来るはずだけど……」
噂をすればなんとやら。

入口のドアが開いて美しい女性が姿を現した。

「たっだいま〜。もう二人とも来てたんだ」

「ルーアさん、本日はお招きいただきありがとうございます」

エディはうやうやしく一礼した。

アドルもそれにならう。

「ちょっと、あたしの時と対応違くない？」

「お前は年下だけどルーアさんは年上だから」

「ん？　アドルって何歳なの？　どう見てもあたしと同じかそれ以下にしか見えないんだけど」

「失礼な。これでも二十だ」

「嘘……」

「ちなみにエディは二十四」

「え？　もっと上だと思ってた」

「オレってそんなに老けて見える？」

エディは少し涙声だった。

彼にしては珍しくまともにショックを受けているようだ。

シリルはしまったという顔をして、謝る。

基本的に単純なのでエディはすぐに回復した。

「全員揃ったし、ちょっと早いけどそろそろ始めない？」

ルーアがワインボトルを片手に言った。

「そうですね」

手持無沙汰だったアドルは即答した。

※

乾杯の音頭はエディがとると言った。

まず彼は詳細に今回の事件について語り始める。

無駄に長い。

そろそろ合図を促そうと思ったところで、前振りは終わった。

「皆様、グラスをお持ちください」

四人が各々の飲み物を入れたグラスを掲げる。

「え～、それでは今回の事件の解決を祝って、乾杯！！」

「かんぱ～い」

エディの唱和を合図にそれぞれグラスを当て交わした。

楽しい慰労会の始まりである。

しかし、予想を超えたイレギュラーな存在によってアドルの笑顔はぎこちなかった。

彼が見ているのはテーブルの上。

ずらりと並ぶ料理の数々だ。

……いや、果たしてこれを料理と呼んでいいのだろうか。

「シリル……この料理って」

アドルは声を震わせながら料理を指さす。

「頑張って作ったんだから」

「そ、そうか」

「うん。食べてみてよ」

シリルの笑顔を前に、アドルは必死に話題を逸らす。

「そういえば料理苦手そうだったからてっきり指に絆創膏巻いてると思ってたのに巻いてないな」

「あ、あたしがそんな失敗するはずないじゃない」

目に見えて狼狽するシリル。

その隣でルーアが可笑しそうに笑った。

「ウソはいけないわよ。この子、指という指から血をだらだら流して『お願い！魔法でこれ治して』って何回も頼まれたの。おかげで私の魔力はすっからかん」

「ル、ルーア！　言わないでって釘をさしたのに！」

「ごめんごめん。とにかくこれをシリルが頑張って作ったのは事実。だから残さず食べなさい」

「わ、わかりました」

時間稼ぎは呆気なく終了。

アドルは隣に座るエディの脇を肘で押した。

コマ送りのような鈍い動きでエディがこちらを向く。

顔を絶え間なく汗の玉が伝っていた。

『これどーすんだよ。お前が頼んだんだから先にお前が食えよ。むしろ食ってください』

エディが小声で助けを求めてきた。

助けて欲しいのはこっちも同じだ、とアドルは内心で嘆く。

『だってこれ見てみろよ』

料理らしき紫色や緑色の毒々しい物体が綺麗な皿を汚している。

シリルが得意げにメニューの紹介を始めるが、そのどれもがアドルの知っているものと合致しない。

どう作ればこんな状態になるのか？

皆目見当もつかない。

固いのか柔らかいのか、熱いのか冷たいのか、食べたら死ぬのか、死なないのか。

予想できるはずもなく、例えこれが新型の宇宙食だと言われても信じられない。

まだ怪異を捕まえてきて皿にのせた、という方が百倍信用できる。

ちら、とシリルの様子を窺うとその瞳が行動を急かしていた。
出された料理に長く手をつけないのは怪しまれる。
アドルは悲壮な覚悟を抱いて、一番安全そうなスープをスプーンですくう。
正面ではシリルが目を輝かせながらこちらを見ている。
逃げ場なし。
額に汗が滲む。
紫色の液体が入ったスプーンを目の高さに合わせる。
じっくり観察していると、シリルが怪訝そうな顔をした。
これはまずい。
アドルは途方もない逡巡の末、ついに腹を括った。
最近は見てくれが悪くても味が絶品というパターンが普及しつつあるのでこれもきっと大丈夫だ。
そう自分に言い聞かせながらアドルはスプーンに口をつける。
突然、肩を誰かにゆすられた。
シリルだ。

「どうしたのよアドル」
「どうしたって何が？」
「何がって……一分近く固まっていたじゃない」
「え？」
アドルは改めて奇怪極まりない料理の群れを凝視した。
おかしい。
たった今、スープを口にふくんだばかりなのに。
間の記憶がない。
過程がすっとばされて結果だけが残っている。
「アドルが食べたいって言うから作ったんだから。残したら承知しないわよ」
部屋に備え付けられたシステムキッチンは紛れもなく高級品だ。
最高の環境から最低の料理が出てきた……そんなことは口が裂けても言えるはずがない。

こういった主人公らしい危機的状況に陥った時の対処法は三つ。

一つ。漢らしく我慢して全部平らげる。

二つ。片っぱしから言い訳を並べて回避する。

そして三つ……。

アドルはエディの耳元で禁断の言葉を囁いた。

「エディ。頼む、食べてくれ」

「カミカゼは嫌いなんでね、遠慮するよ」

「いいのかエディ。これはアイドルの料理だぞ？　つまりシリルの味だ」

「なん……だと？」

「お前一人がシリルを味わえるんだ。舐め回し、しゃぶりつき、その全てと一つになる」

「お！お！お！」

「畜生！羨ましいぜ！お前は世界一の幸せものだ！！」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

それからの惨状はとても描写に耐えられるものではなかった。

修羅と化した漢、エディが嬉々として謎の物体X相手に無双を繰り広げる。

その光景はおぞましい一方で爽快であり痛快であった。

数分後。

白目をむいたエディが絨毯に転がっていた。

「エディ。おい大丈夫かエディ」

へんじがない。ただのしかばねのようだ。

アドルは絨毯が汚れないようにエディを仰向けにすると、そっと彼の瞼を閉じてやった。

「おやすみエディ。安らかに眠れ。お前のパソコン内のハードディスクは責任をもって俺が使ってやる」

※

同時刻。

リッツ・ユーフォリアの前に一台の高級車が停車した。

その到着を確認し、すぐさまホテルから二人のドアマンが車に駆け寄る。

黒塗りの車から優雅な佇まいで降りる淑女が一人。

女性は、口元を歪めた。

「ここがあの女のハウスですね」

どこか動きの固いドアマンの先導に従って、女性は豪華なドレスの裾を風に揺らしながら凛とした足取りでホテルのゲートをくぐる。

それに続くは屈強な男とメイドの二名。

三者とも明らかに一般人とはかけ離れた異様な存在感を纏っている。

無理もない。

彼女らはこの国の中心に近い人間たちなのだから。

※

開始早々エディが食事を平らげてしまったため、一同は途方に暮れていた。

もちろんアドルは内心では安堵している。

「もう……どーすんのよ」

「飲み物は十分あるけどね」

ルーアの言うとおり酒やジュースに不足はない。

しかし食べるものがない。

こうなるとルームサービスを頼むか、買い出しに出るの二択に絞

られる。
人目につかない理由で部屋を会場に選んだので、レストランでの食事は本末転倒だ。
まぁこのホテル内ならプライバシーの心配はなさそうだが、今更感がある。

「元はと言えばアドルのせいよ」
「ごめん」
「こうなったら……アドル買ってきて」

アドルは自分のせいで今の状況が生まれた手前、二つ返事で承諾した。
エディを除く三人で買ってくるものを決める。
なんというか、シリルやルーアが欲しいと言うものは甘いものばかりだった。

「この量、全部食べるつもりか？　胸焼けしそうだ」
「甘い物は別腹だから大丈夫」
「入る腹は結局同じだろ」

「つべこべ言わずさっさと買ってきて」
「この量だと……二十分くらいで戻ってくるよ」
「遅い。あの、なんだっけ、てんぷれとか言うやつ使ってよ」
「はあ？」
「時間をどうこうして千倍の速度で動けるんでしょ？」
「あれは消耗が激しいの。三秒も使えばミイラになる」
「三秒ってことは三千秒ってことでしょ？　なら五十分もあるじゃない」
「ってか、そんなことのために天遊を使えるか！」
反論の最中、不意に昼間の出来事が脳裏をかすめた。
（そういえば今日はもう二回も使ってるんだよなぁ……）
思えば天遊の存在理念から逸脱した使い方をしている。
「とにかく絶対ダメだ。すぐに戻ってくるから待ってろ」

アドルは財布を片手にドアへ歩み寄る。

その時だった。

何の前触れもなくシリルの部屋のドアが吹きとんだ。

「なっ」

次に何かが部屋の中に放物線を描いて投げ込まれる。

アドルがその存在に気付いた時はもう手遅れだった。

破裂音がして、部屋中に閃光が迸る。

（閃光手榴弾（スタングレネード）！？）

アドルは咄嗟に回避姿勢をとったものの、紙一重の差で間にあわず、非殺傷を目的とした光と音の餌食になる。

視界が真っ白になり、何も聞こえない。

崩れそうになる体をなんとか保ち、早口に言葉を紡ぐ。

「“鳴益束”！　状態異常を回復しろ」

瞬時に世界がクリアになる。

敵の発見よりシリルたちの安全の確保に移ろうとしたその直後。

喉元に鋭い刃が突きつけられていた。

抵抗する隙も与えられないまま地面に組み伏せられる。

（まずい……！）

アドルは強引に首をずらして自らに技をかけた人間を視認し……

下顎がおちた。

「な、ななな、な」

開いた口が塞がらない。

徐々に、青筋だけが音をたてて額に刻まれる。

「いかん。いかんなぁ～。もしこれが実戦だったらオメェはもう死んでるぞ？」

アドルの背に腰を下ろす、無精髭を生やした中年の男が言った。

「お……」

アドルは怒りを通り越して呆れかえる。

しかしそれでも微量ながら怒りは残っているわけで、声を大にして叫ぶ。

「親父！！」

※

「アドル！　これっていったいどーゆうこと！？」

「俺に聞かないでくれ」

アイドル様は大変ご立腹のようだった。

先ほどから怒りの矛先がずっとこちらを向いている。

現在、アドルたちはホテルの特別区画に設けられた一室で円卓を囲んで座っていた。

アドルは今一度、この部屋にいる面子を見回した。

まず自分の左隣にいるのがシリル。

その隣がルーア。

更にその隣がエディだ。

ここまではいい。

スタメンである。

問題はここからだ。

アドルの右隣にセレスフィア。

そう。

この国の王女、セレスフィア・リーヴィス・ルノワールである。

その隣に彼女の専属メイド、テレサ。

極めつけはド派手なワインレッドのスーツを着た男。
アドルの父、クライヴ・レンフィールドだった。

「どうしてここにいるんだよ！？」

アドルはセレスフィアに言った。

「知りませんでしたか？　ここは王室御用達のホテルですよ」
「そうじゃない！　どうしてわざわざシリルの部屋を訪ねてきたのかって訊いてるんだ」

「セレスフィア様は心配だったんですよぉ～」

「心配？」

「テレサは少し黙っていてくださいね」

「あと親父も。ついてくる理由が分からない」

「もちろんセレス様の護衛に決まってるだろ。俺の仕事がなにか忘れたのか？」

「魔法騎士団の団長だろ。王女の護衛も任務のうちってか」

「そのとおり。本来なら十を超える人間がセレス様を囲む必要があるんだけどな。俺なら一人でオーケーだ」

「なんつー自信……」

「それより俺から一言お前に言っておきたいことがある」

「なんだよ？」

「息子よ！　お父さんは不純異性交遊なんて認めませんよ！　この面子、まさか乱交パーｔ、ぶっ！！」

大柄なクライヴの体が軽々と吹き飛んだ。

セレスフィアが魔法を使ったらしい。

「クライヴ騎士総長。少し口を慎んでください」

「すみません」

中年のオヤジが鼻血を出しながら平伏している。

なんとも情けない姿だ。

アドルはちらりと取り残されている三人に視線を送った。

エディはセレスフィアと面識があるはずだ。

それでも回数にすればほんの僅かなので、いつもの調子が出ていないように見える。

シリルとルーアに至っては、目の前で繰り広げられる現実味のないやりとりに唖然としていた。

「セレス、俺に迷惑をかけるのはまだいい。だけどシリルやルーアを巻き込むな」

「オレは！？」

「エディはどーでもいい」

「ひでぇ！」

「すみません。ですがお二人にも関係のある話なんです」

「それって……」

「ですがその前に親睦を深めるため、ゲームをしませんか」

「そんなことより飯が食べたい。俺たちは腹が減ってるんだ」

「ゲームに勝てば美味しいものをご馳走すると約束します」

「ゲームって……なんのゲームだよ」

「人生ゲームです」

「めちゃくちゃ俗っぽいものが出てきたな」
「ゴールした人から順に食べられます」
「テレビでよくあるパターンかよ」

アドルは困惑しっぱなしの三人の様子を見る。

「どうする？　……って意見を聞いたところで無駄か。こいつは絶対やらせるつもりだからな」

するとシリルがおずおずと手を挙げた。

「どうした？」

「アドルと王女様ってどういう関係？　呼び捨てだし」

「腐れ縁だ。それ以上でも以下でもない、多分」

「私はアドルさんの許嫁です」

「だあああああ！　お前は余計なことを言うな！　また尺が伸びるだろうが！」

「王女様が許嫁って、あんた本当は何者なの？　実は物凄い高貴の生まれ？」

「誤解するなシリル。こいつの言うことは出鱈目だ。俺は良識ある

一般人で、お前が考えているような可能性は一つもあてはまらない」
「本当ですか王女様？」
「どうでしょうね」
セレスフィアは悪戯っぽく言った。
「ティレットさん。私のことはセレスで構いませんよ。ブリッツさんやカーソンさんもお好きなようにお呼びください」
予想外の申し出に、シリルはきょとんと目を丸くする。
「え、でもあたしなんかが王女様をそう呼ぶわけには……」
「いいんです。だって王女なんて堅苦しいじゃありませんか」
「えと、じゃあ……セレスフィアでいい？」
「はい」
「私はセレスフィアちゃんかな」
「オレはセレスたんで」
「お前は少し自重しろ」

このノリで全員の自己紹介が進む。

テレサはその物腰の柔らかさから誰もが好印象を持ったようだ。

クライヴに関しては名乗るまでもなくみんな知っていた。

彼は実のところ、数々の戦役で武勲をあげた生ける伝説だ。

国の防衛の要ともいえる魔法騎士団団長なので、聖典にも多く出席している。

ルーアがサインをねだるほど、本当は凄い人物なのだ。

そこが息子のアドルとしては少々複雑なところで、親子の関係が微妙な原因の一つでもある。

全員の紹介が終わったことを確認すると、いつものようにセレスフィアが指をはじく。

円卓に光芒が描かれ、次いで人生ゲームが出現した。

手品のような魔術を目の当たりにし、セレスフィアと関係の浅い三人は驚きを隠せない。

セレスフィアにすれば何気ないことだが、本来遠隔転移魔術は上級魔術の部類に位置する。

こうも平然と行使することは驚嘆に値するのだ。

何はともあれ、卓上に人生ゲームが用意された。

人生ゲーム――――双六の発展形であるボードゲームだ。

ゲーム序盤のルーレット目によって「人生の筋道」が決まり、その後の人生が左右されていく。

プレイヤーは何故か最初から車に乗っており、それを駒とする。

また、サイコロではなく「ルーレット」を回し、人の一生になぞらえたイベントをこなしていく。

双六と違う点は、所持金の概念が取り入れられていることである。

付属の紙幣や小切手を使い、プレイヤー同士でしのぎを削る。

ゴールするためには一定額の所持金が必要なので、人生ゲームにおいて非常に重要なファクターとなっている。

更に特殊な効果を持つカードを使用することにより、一発逆転も狙えたりする。

他にも家を購入したり、結婚・出産することも可能だ。

……とまぁ簡単な概要とルールを説明したところで、ゲームの開始が宣言される。

「第一回！オールスター人生ゲェェェェムッ！！」

部屋に備え付けてあったカラオケのマイクを片手に、エディが変なポーズをきめた。

「司会は情報の神に愛された男こと、エディ・カーソンだ！！」

最早アドルは「情報の神ってなんだよ」とつっこむ気すらおきない。

他の皆は意外にも合いの手を入れたりして盛り上がっていた。

状況に追いついていないように見えるのはシリル一人だけだ。

ルーアさんは元々ノリがいいらしい。

こういったことに場馴れしているはずのアイドルを硬化させるこの異空間。

それも超最高級のＶＩＰルームでだ。

（今、世界でもっとも馬鹿なことをやっているのは俺たちなんだろうなぁ）

アドルは他人事のように冷静に分析することで現実逃避するのだ

った。

そんな彼の様子を気に留めることもなく、司会は絶好調そのもの。

その一挙手一投足全てが大袈裟だ。

エディはすぐさま選手紹介に移った。

「ここらで人生の縮図とも言うべきこの恐ろしいゲームに挑戦する猛者たちを紹介しよう！！」

この辺りまでくるとエディが格好良く見えてくるから不思議だ。

「まず一人目。完全無欠！この国の王女様！セレスフィア・リーヴィス・ルノワール！！」

「私は何者にも屈しませんよ？」

セレスフィアはたおやかな笑みを振りまく。

腹黒という確定事項があるので、まったく油断できない。

「二人目っ！　セレスフィア様に仕える絶対の従者、テレサ・シトロン！！」

「セレスフィア様のために頑張ります～」

テレサは二つの膨らみを揺らしながら元気に手をあげた。

その姿はあどけない少女のよう……しかしセレスフィアのためならどんな手段も厭わないことをアドルは知っている。

「次っ！　エクスファルナ王国最強と謳われる魔法騎士団。その彼らを率いるナイトオブナイツ！クライヴ・レンフィールド！！」

「最速は俺だ。息子だろうがセレス様だろうが、誰も俺の隣は走らせねェぜ」

顔から火が出そう。アドルの率直で正直な感想だ。

大人げないにもほどがある。

むしろ正気かと疑いたい。

「四番手っ！　エクスファルナ国民なら知らぬものはいない、人々に夢を与えるアイドル！　シリル・ティレット！」

「ど、どうしてこんなことになったのよ……」

それはこっちが聞きたい。

アドルはこの変人どもの群れからシリルだけは守ろうと心に誓った。

「五番！　ついに参入姉御肌！

「このメンバー、久々に燃えてきた！」

ガン＝カタの使い手だということも含めてルーアの経歴は依然謎のままだ。

ただ、まともな人生を歩んでこなかったということだけは容易に推測できた。

「そしてラストォ！　貧乏で不細工で女々しくて弱くて助平でＫＹな生き物、アドルなんとか」

「ちょっと待て！！　俺の説明だけ明らかに他と違うんだけど！！」

「さあ！　総勢六名、一体誰が栄光を掴むのでしょうか。アドルでないことだけは確か。それでは間もなくスタートです！！」

かくして阿鼻叫喚の遊戯（ゲーム）が幕を開けた。

※

……なんていっておいてなんだが、ゲームは非常に地味に進んだ。

ルーレットを回し、車を進め、偽の紙幣を握り、株の大暴落に泣く。

最初はエディの実況が場を盛りたてていたが、今はもう騒音でしかない。

早くも飽き始めた時、セレスフィアがプレイを制止した。

「どうしたんだ？」

アドルが尋ねると、それに答える代わりにシリルは指をならした。

唐突にゲームボードが怪しい光を放ち、形状を変化させていく。

皆、一様にハイテクおもちゃの存在に驚愕していた。

白を基調としていたボードが黒を基調としたものに変わった。

「な、なんなんだよこれは！」

「名付けて闇の人生ゲーム。魔術を組み込んだアップグレード版です。マスのイベントが幻覚によって疑似体験できます」

「それって危険なんじゃ……」

「そうですよ。でもそれでこそ面白いんじゃありませんか」

セレスはこともなげに返事をする。

アドルは額に手を当て、次にシリルに言った。

「ここでギブアップしておけ。自己破産宣言だ。でないときっと酷い目に遭う」

「あ、あんたはどうすんのよ」

「こいつらに負けるのだけはヤダ。特にセレスと親父。ぜってー勝つ！」

「なんかもう……バカばっかね」

まず順番が回っていたクライヴがルーレットをまわす。

出た数字は九。

魔術によって手動で車を動かさずとも勝手に進むようになった。

「どけどけぇ～。俺の前を走るんじゃねぇー！」

クライヴカーが次々と先頭車両をぬかしていく。

そして止まったマスは……。

「ん？『懸賞当たって南の島へ旅行。だけど未曾有の大噴火で恐竜復活。戦って大怪我。三ターン休み』だと！？」

読み上げた瞬間、クライヴは倒れこむようにして机に突っ伏した。

「どうなったんだ？」

「これは幻覚を見ているんですよ」

セレスフィアが嬉しそうに手を合わせて微笑んだ。

その直後、

「うおおおおぉぉぉぉぉぉぉおおっ！！　爬虫類ごときが俺の相手になるはずねぇだろ！　俺流秘・奥義！“破邪斬魔剣”！！」

クライヴが年甲斐もなく恥ずかしい台詞を叫んだ。

その上、テーブルの上でクロールをするように両手をばたばたしている。

見ているこちらが居た堪れなくなるシュールな光景だった。

これにはさすがのセレスフィアも動揺したらしい。

「と、とにかく……どんどん進めましょう。次の方は誰ですか」

「お前だけど」

「あ……」

セレスフィアはう～、と唸ってどこからか一枚のカードを取り出した。

「このカードの効果を使います」

「そんなルカードあったか！？」

「あったんです」

セレスフィアは有無を言わさぬ迫力でエディに近づき、

「審判さん。カード使ってもいいですよね」

「いや、オレは審判じゃなくてしか――――」

「いいですよね？」

「……はい」

屈服させた。

認められたセレスフィアは意気揚々とカードを発動させる。

「私のカードの効果は他のプレイヤーとターンを入れ替える、です。誰にしましょうかね」

「はい！」

真っ先に手を上げたのはテレサだった。

「私がセレスフィア様の身を御守りいたします～」

「テレサ……ありがとうございます」

二人はがっしり握手を交わし、ターンが入れ替わった。

一分後。

「あはははははははははははははは～」

清楚なメイドさんは見るも無残な廃人と化していた。

彼女もクライヴと同じく、机に突っ伏したまま小刻みに痙攣している。

どこか嬉しそうなのが余計に気味悪かった。

ちなみに当たったイベントは「好きな人にいぢめられて道を踏み外す。所持金が半分になる」だった。

考察するのは色々と危険なので避けておこう。

「さぁ、テレサの尊い犠牲のお陰で私は未だ健在です。次はどなたですか？」

「お前だよ。お前の次がテレサさんだったから」

時が止まった……ような気がした。

アドルはセレスフィアが不憫に思えてしかたなかった。

誰よりも聡明で常に凛々しく毅然としている彼女が今は真っ青になっている。

しかし容赦するアドルではなかった。

「ルールだぞ。ルールは守らなくちゃな。一国の王女様が決まりを守れないと国民に示しがつかないもんなぁ」

これまで蓄積していた鬱憤を晴らすべく、アドルは全力で言葉責めに出る。

「見てみたいなぁ。セレスがあんな姿になるところ。乱れてあられもない姿を俺やエディにじっくり観察されるんだ」

後の鬼畜主人公誕生の瞬間であった。

……ただしセレスフィアが最後の武器を使っていなかったのなら。

「アドルさん……助けてください」

絶世の美少女による涙を湛えた上目遣い。

最強なのは銃でも剣でも魔法でも、ましてペンでもない。

対男性リーサルウェポン。

それこそが女の涙だった。

「今、アドルさんは先ほど私が使ったものと同じカードを持っています」

確かにいつの間にかアドルは例のカードを手にしていた。

「アドルさんはどんな時でもどんな敵からでも私を守ってくれると約束したじゃありませんか」

「し、したっけ」

「しました」

「助けてくださいアドルさん」

セレスフィアが更にずいっとテーブルに身を乗り出した。

絶妙なアングルでドレスの隙間から白い豊かな双球が露わになる。

遠くでシリルがきゃんきゃん騒いでいる気がしたが、既にどうでもよかった。

つまり詰み。

「わ、分かった」

カードを使用する。

結果、順序が入れ替わり、アドルがルーレットを回すことになった。

この時、まだアドルは諦めていなかった。

「あの幻覚に耐えられれば次のターンで逆転できる。最後に立っているのはこの俺だ」

「そういうゲームじゃねぇから」

エディが珍しくつっこんだが、気にせずルーレットを回した。

一分後。

部屋に絶叫がこだましたのは言うまでもない。

※

アドルがリタイアしたことによっていよいよゲームは終盤戦。

大詰めを迎えていた。

残るはルーアとセレスの二人だけ。

順番だとルーアが先にルーレットを回すことになる。

勝利を確信したのか、セレスフィアは余裕綽々だ。

鼻歌まで歌っている。

シリルはその態度にかすかな苛立ちを感じていた。

言葉遣いは丁寧だが、なんて傍若無人で腹黒い王女なのだろう。

この国の王女には以前からその美しさに対する憧れや、同年代ということで親近感があった。

しかしこれまた猫を被る自分が言えた義理ではないのだが、実際に会ってみて幻滅した。

まさかあの気品溢れるセレスフィア様がこんなにも恐ろしい女だったとは思いもしなかったのだ。

極めつけはあの泣き落しと色仕掛けのダブルコンボだ。

（あの女は王女じゃなくて本当は魔女なんじゃないの？）

けっこう本気でそう思った。

それにアドルの彼女への対応も納得いかない。

愛称で呼ぶくらい親しい仲なのに、終始セレスフィアの言いなりだ。

彼女に迫られたときのアドルの顔といったら……思い出すだけでも腹立たしい。

あの事件で見せた堂々とした態度は幻で、本当の彼はこうも流される人間なのか。

シリルは未だ幻覚に囚われたままのアドルを見やる。

ブリッジしながら悲鳴をあげていた。

記憶から即削除する。

「さぁ、ルーアさん。残るは貴方お一人だけです」

セレスフィアは腰に手を当てて自信満々に言った。

「う……」

百戦錬磨らしきルーアもさすがに今回は顔が青ざめている。

なんとかしてルーアを勝たせることができないだろうか。

シリルはルーアの場に目を向け、ハッとなった。

「ルーア、勝負はまだ分からないよ」

「逆転の秘策があるの？」

「逆転……できるか分からないけど同士打ちならできるかも」

言って、シリルはルーアが所持していた一枚のカードを差し出す。

『次のマスのイベントを任意のプレイヤーもこなす』

カードにはそう記載されていた。

つまりルーアが幻覚を見せられたとして、その幻覚はセレスフィアにも及ぶということだ。

大胆不敵な笑みを浮かべる王女に一矢報いたい。

そのシリルの心情をルーアは汲み取ったらしく、

「いいね。他に手段もないし。やってやろうじゃないの」

カードを受け取った。

一連のやりとりを聞いていたセレスフィアは、なんだか愉しそうだ。

「このまま勝つのも味気ないと思っていたので、それには賛成します」

「セレスフィアちゃん。私は負けず嫌いなの」

「あら奇遇ですね。私もです」

「最後に意識のあった方が勝者よ」

「ええ。受けてたちましょう」

「さあ！　運命のルーレットだ！！」

存在を忘れかけていたエディが、マイクを握って叫ぶ。

ルーアの指がルーレットを回した。

出た数字に従って自動でルーアの車がマスを走る。

止まったマスは、やはり到底リアルな人生では遭遇しないようなイベントがあり、効果が発動する。

結果的に……例外なく二人も幻覚の餌食になり、正気を失った。

広い部屋に散らばる異常者たち。

呻き、奇声を上げ、目に見えない何かにあらがっている。

屍累々とはまさにこのことだろう。

シリルは嘆息し、取り敢えず二人の痴態に興奮する変態をどうしようかと考えるのだった。

※

ゲームは結局引き分けということで、料理の独占はないことになった。

そのため、卓上は豪華な料理で隙間なく埋め尽くされている。

ようやく慰労会らしくなった。

若干……というか半数ほど邪魔ものがいるが、そこは目を瞑ろう。

シリルは未だに腑に落ちないところがあるものの、諦めるのが最善だと判断していた。

食事が一段落したところで、アドルがセレスフィアに尋ねた。

「そろそろここに来た本当の理由を教えてくれ」

「そうですね。私たちが来たのはシリルさんとルーアさんの件についてお話することがあったからです」

「そういうことか」

アドルが合点がいったのか小さくうなづいた。

しかし何も知らないシリルは頭に疑問符を浮かべる。

（あたしとルーアの件って……何もないよね？）

シリルもルーアもセレスフィアとは初対面だ。

なのに彼女は自分たちに話しがあるという。

「どういうことよ。ちゃんと説明して」

「ええ。これはシリルさんとルーアさんに関係のある話なのでよく聞いてください」

すると急にセレスフィアの雰囲気がかわった。

これまでとはうって変って、王女の顔になる。

本物の迫力を前に、シリルは佇まいを直した。

「お二人はあの事件の日、アドルさんの力……天遊を目にしました。アドルさんが天遊を扱えることは、私たちを含めほんの少数だけが知っている事実です。これがどういうことかお分かりですか？」

シリルには分からなかった。

代わりにルーアが核心を探るように問う。

「……天遊の存在は秘匿されてるってこと？」

「そのとおりです。実際に力を見たお二人なら理解できるはず。天遊は使い方次第では非常に危険なものなんです」

危険なもの。

シリルはあの時のことを思い返す。

ガイウスを圧倒するアドルの姿。

心強い反面、得体のしれない力にわずかな恐怖を感じていた。

「た、確かに凄い速さで動いたりとか、何もないところに穴があいたりとか、人間業じゃないなとは思ったけどそんなに危険なものなの？」

「天遊の本質は小規模な世界改変にあります」

「世界……改変？」

聞きなれない言葉だった。

戸惑う二人の心情を察してか、アドルがセレスフィアに目配せする。

「ここからは俺が話そう。天遊は大きく分けて三つの力がある。物質を同じ性質を持つ物質に作り替える“綴万”、範囲内の人間の身体能力や精神状態に干渉する“鳴益束”、そして時間や重力といった法則・概念をコントロールする“王道”。このどれもが使い方一つで世界の均衡を崩す可能性を秘めているんだ」

「そんな……」

「例えば“綴万”を使えば兵器を大量生産できる、“鳴益束”なら意思の弱い人間なら思うがままに操れる、“王道”においては無限の危険性がある」

シリルは頭の中でアドルの言葉を反芻する。

彼の言うことが本当なら、天遊は人智を超えている。

「で、でも、アドルはそんな使い方しないんでしょう？」

「当り前だ。だがもし、この力の存在が欲のある者に知れればどうなると思う？」

「どんな手を使ってでも手に入れようとするかもね」

冷静に話を聞いていたルーアが言った。

彼女の発言は的を得ている。

それほど強大な力があると分かれば、悪用しようと考える人間が現れてもおかしくない。

「そうだ。俺が天遊を使わないのなら、天遊を使わざるをえない状況をつくりだせばいい。いちばん手っ取り早く、効果が期待できるのは人質だな」

「つまり、ええと、天遊のことが広まると、アドルの近くにいる人たちが危ないってこと？」

「まぁ簡潔に言うとそうだ」

「ですからお二人には選択していただきます」

「選択？」

セレスフィアは静かに頷いた。

「天遊のことを胸にしまいこみ、アドルさんに協力するか。それとも今ここで私たちに天遊に関する記憶を消されるか」

「そんな……」

「申し訳ありませんが今ここで決めていただきます」

「あたしは……」

シリルの答えは決まっていた。

躊躇する理由はない。

どんな記憶だとしても失うことを許容できるはずがない。

こちらを見つめるセレスフィアの表情は大きな選択を迫っているにも関わらず、沈鬱の欠片も感じさせなかった。

つまりシリルが選択する答えを分かっている。

それだけが癪だった。

「あたしはアドルに協力するわ。ほんの一部だとしても記憶を消されるなんて御免よ」

「私も同感。それにこの面子と一緒にいれば面白そうだし」

「ありがとうございます。これでアドルさんも少し楽になりますね」

シリルにはそう言ったセレスフィアの表情が、今日見た笑顔の中で最も素敵に見えた。

※

「では他に何か質問はありませんか」

一通り話がまとまったところで、セレスフィアがシリルとルーアの二人に尋ねた。

「私は特になし。シリルは？」

シリルはしばらく思案顔だったが、やがて口を開いた。

「セレスフィアじゃなくてアドルに質問してもいい？」
「かまいませんよ」
「俺の意思は無視か」
「ずっと気になってたんだけど、アドルのあの力ってどうやって手に入れたの？」
「それは……」
「あ、言いたくないならもちろん言わなくていいから」
「う～ん……俺は別にいいけどセレスはどうだ？」
「シリルさんたちは数少ない協力者なんです。全て話しましょう」
「そう言うなら……少し重い話になるけどいいか？」
「うん」
「よし。天遊のことならまずは俺の出生について話さないとな」
言いながらふと窓の外に目をやると、いつの間にか雨が降っていた。
幾千幾億の水条が建物を地面を人を叩く。
それはアドルの心にも痛いほど降り注ぐ。

拳を握りしめて追想する。

あの日も……今と同じように猛雨の滂沱に耳を傾けていた……。

ｔｅｎｐｌａｔｅ：４　人生生き残りゲーム（後書き）

またまた二万文字オーバーです。
もう謝罪のしようがない……。
余談ですが、今回のタイトルの元ネタはロックバンドのスピッツの曲「青春生き残りゲーム」からいただきました。
偶然にも前回のタイトルもスピッツの曲名です。
狙ったわけじゃないんだけどなぁ。

第五話予告とか（前書き）

今回は短いです。
もともとコレ、蛇足だったし廃止しようかなぁ

第五話予告とか

セレス：はぁ……

アドル：はぁ……

クライヴ：ふぅ……

セレス：あれを作った会社を潰そうと思うんですけど、どうですか？

アドル：子供たちに夢と希望じゃなくてトラウマを植え付けるからな

クライヴ：兵器として転用すればどうだ？

アドル：どうやって敵にルーレット回させるんだよ……

※

セレス：今回はとくに話題もないので次回予告に移りましょうか

アドル：次回はシリアスだ。ようやく俺らしくなってきた

クライヴ：ちなみに俺が主人公

セレス：違います

アドル：違う

セレス：私が主人公です

アドル：それも違う

セレス：あながち間違いではないと思いますけど

クライヴ：まぁ確かにセレス様が主役かもなぁ

セレス：誰がメインヒロインかということを次の回ではっきりさせましょう

アドル：だからヒロインなんていないって。ダブルヒロインものでもないからな

シリル：もしかしてまだ増えるんですか？

アドル：そのうちロリっ娘が……ょぅ　ょじゃないから安心しろ

セレス：安心できません！

アドル：それより予告しろ

クライヴ：仕方ねぇなぁ

アドル：親父には言ってない。というかいい加減帰れ

クライヴ：次回は二部構成だ。第一部がアドル出生の秘密。天遊とはなんなのかが明かされる

セレス：ようやくですね

クライヴ：続く第二部。アドルとセレス様の出会いから現在に至るまでが描かれるぞ

アドル：二話に分けた方がいいんじゃないか？

セレス：作者曰く「この話はつまらないから二話も書くモチベーションが保てない」らしいですよ

アドル：予定されてる文字数は？　まさかまた二万文字超えたりしないだろうなぁ？

セレス：……超過する可能性が高いです

アドル：分けろ！　絶対に分けろ！　読者様方が読みにくいだろうが！

セレス：……検討しましょう？

アドル：なんで疑問形なんだよ

クライヴ：そういう細かいことを気にするからオメェはナニもかもが小っせぇんだよ

アドル：お前マジで帰れ！！

クライヴ：父親に逆らうとはいい度胸じゃねぇか。戦る気か？

アドル；ああいいぜ。今日こそ俺はアンタを超える！

セレス：……とまぁ後ろで親子ゲンカが始まったので今日はこのあたりで終わりましょう。あっ、二話に分けるか分けないかで意見のある方は軽い気持ちで感想欄に書いてくださいね

第五話予告とか（後書き）

次の話まで少し間が空くと思います

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4544l/

天遊人〜テンプレーター〜

2010年12月8日07時28分発行